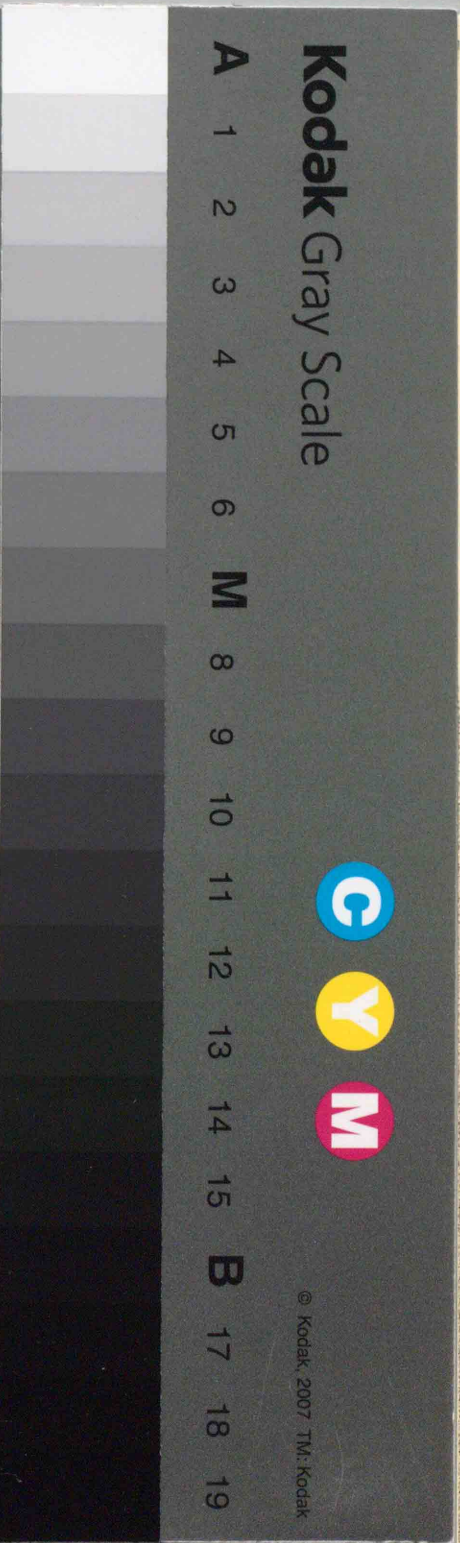
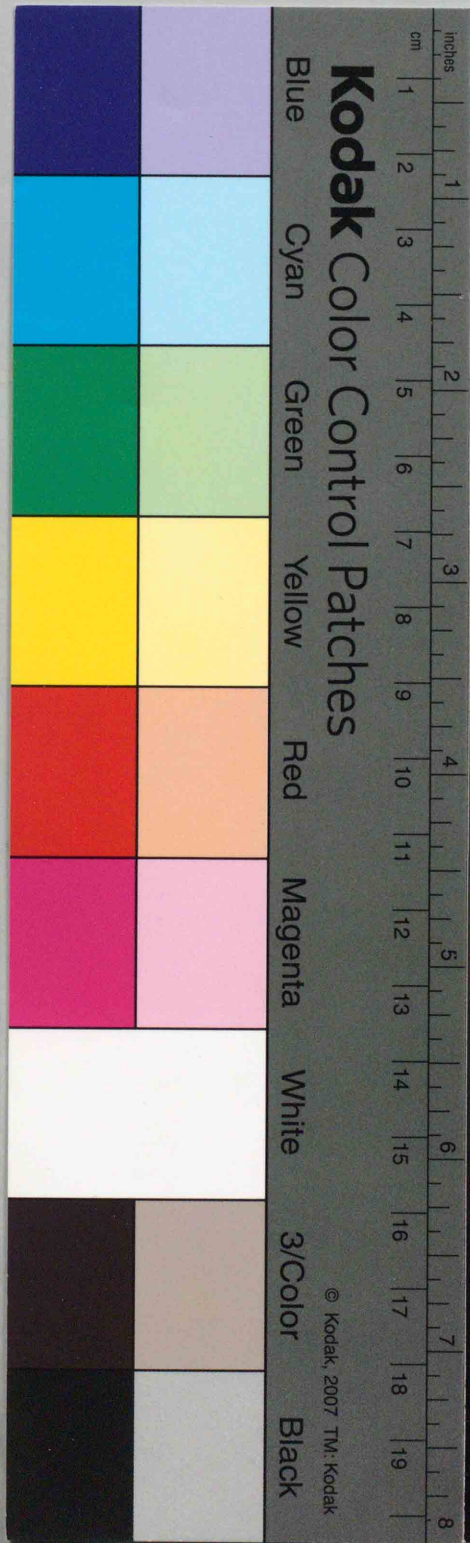
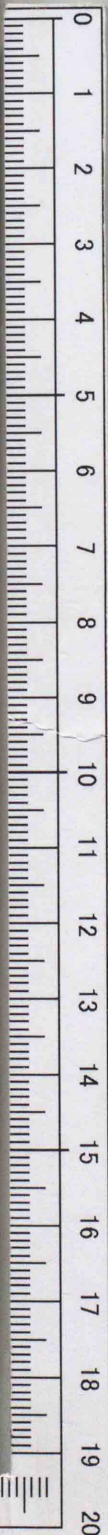


新訂
新撰國語讀本
卷五

3759
Sal9
資料室



41528

教科書文庫

4
810
41-1925
200030 1482



3759
5219

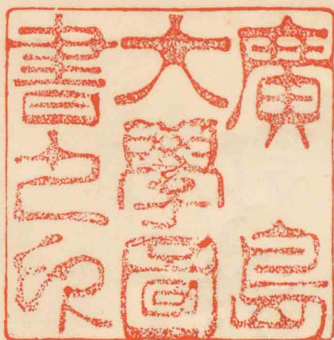
日二十二月一年四十正大
濟定檢省部文
用科語國校學中

新新撰國語讀本

文學博士佐政編

大町芳衛
武島又次郎
杉敏介
補修

株式會社
明治書院



訂新撰國語讀本卷五目次

一月雪花……………	芳賀矢一……………一
二 櫻の日本上……………	九
三 櫻の日本下……………	一四
四 保津川下り……………	夏目漱石……………一九
五 清角の曲上……………	佐藤春夫……………二七
六 清角の曲下……………	三三
七 由良の思ひで(詩)……………	薄田泣菫……………四〇
八 山紫水明……………	藤岡東圃……………四三
九 鎮守の森……………	笹川臨風……………五三
一〇 オリンピアの回顧……………	黒板勝美……………五六

一一	蜘蛛の絲上	芥川龍之介	三
一二	蜘蛛の絲下		七
一三	白き花	佐藤春夫	七
一四	歸郷(詩)	尾崎喜八	七
一五	田園雜興	大町桂月	八
一六	をさな兒	小林一茶	九
一七	俳句評釋	正岡子規	九
一八	行列	夏目漱石	一〇
一九	所感	阿部次郎	一五
	一、眞面目		一五
	二、幸福な顔		一八
二〇	快活	徳富蘇峯	二二

二一	最上川の奇景上	田山花袋	二七
二二	最上川の奇景下		三三
二三	うまさ泉	石川雅望	二七
二四	小園	正岡子規	三〇
二五	野心	澤柳政太郎	四〇
二六	待賢門の戦上	(平治物語)	四七
二七	待賢門の戦下		五三
二八	讀書の選擇		五九

新訂新撰國語讀本卷五

一月雪花

煌煌たる活動の日の光、西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照す。月の光は温和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫赫として仰いで見ること出来ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば、群陰皆姿を消して、大小の有象無象悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である。

慈愛の光である、炎熱を伴なはぬ清冷の光である。皎潔・無垢・崇美と稱ふべき、やさしい光である。休息・安靜の夜には最もふさはしい。この光に對しては、誰しも人生の慰藉を感ずる、詩的情緒は油然として湧く。晝の間は猛獸と闘つて居る熱帯の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱帯の椰子の葉蔭、寒地の氷の家、眺める人の心は違ふであらうが、限なく世界を照す月光の人の胸懷にしみ渡ることは、恰もその影の千草の露の玉ごとに宿るやうなものである。

うちむかふ月はひとつの影ながらうかぶは千千の思なりけり

である。

荷田蒼生子の歌。

東西・古今、悲喜・哀歡の情熱は、幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。これを嗟歎し、これを吟詠した。詩歌の感吟は、世界各國の言語に充ち満ちて居る。天文學者は言ふ、月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。この冷塊の光が、古往今來どれ程の暖かみを人間に與へたか、また現に與へてゐるか、月は永久に人間の良友である。

雪は月よりも一層冷たい。貧富・貴賤の差別なく、その純潔なる色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓・茅屋も皆同じ色に埋められる。

花ならば咲かぬこずゑもまじらましまして雪降る

み吉野の山

新編古今集、僧仙覺の歌。

といふやうに、眼に入るもの、悉くその下に包まれてしまふのである。

*白樂天の詩句。

*三千世界銀成色。十二樓臺玉作層。

の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白色に比べては、地上の花も甚しく汚く感ぜられるのである。罪罪と散り、紛紛と飛んで、ただ一條の川水を殘して、山といはず、野といはず、またたく中に瓊玉を敷く壯嚴は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花紅葉、色色のながめはもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新緑の色

も目の覺めるやうな心持がする。が、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡したものではないか。一年中、蓮の花の開いて居る極樂淨土は、決して我等の世界ほどに楽しいものではなからう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまざま、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲亂れるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、かうばしい馨さへ有つてゐる。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも無限の詩趣を

年ふれば齡は老
いぬしかはあれ
ど花をし見れば
もの思もなし
房
古今集、藤原良

具へて居る。富貴の庭園に培ふ花の價を生じたのは無理は
ないが、山の花、野の花、いづれも月や雪と同じ様に、一文錢を
要せぬのである。人世に花なくんば、どれほど寂寞を感じる
てあらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花
は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を慎んだの
である。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。
人は死んでも花を忘れぬのである。月雪の眺は、その皎潔を
愛し、その清淨を貴ぶのであるが、花はその艷麗華美を以て
人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ、花やか、花花し、華
美、華麗華奢等の語はみな花に基いた語である。古今東西の
詩歌は擧げるだけ愚である。余はただ花をし見ればもの思

(二) Iceland.

もなし」といふ古歌を以て、總てを總括し得べしと信ずる。
月雪花三つのながめは各、その特長がある。いづれを前い
づれを後といふことが出来ぬ。花を賞して月を愛せぬ人は
ない。月花を愛して雪を賞せぬ人もない。
思へば、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中
氷雪に鎖されてゐるアイスランドでは、氷は即ち人の家て
ある。この地方の人には、寸紅の目を樂しましめるものもな
い。又これに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を
纏うて生息する熱帯の住民は、瓊玉を綴る奇觀は見たこと
がない。瓦斯電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ
繁華な倫敦の住民も、秋冬の半年は美しい月の光を見るこ

伊藤仁齋の歌。

唐の劉廷芝の代
悲白頭翁の詩中
の句。

とが出来ない。我等日本人が、昔も今もこの三つの眺を擅に
 することを得るのは、眞に天賦の幸福ではあるまいか。
 月・雪花の眺は、古人の歴史が加はつて一層の感興が増す。
 世世を経てながめし人のかずにまた我をもゆるせ
 秋の夜の月
 月は古來の歴史を照す鏡である。
 年年歳歳花相似。歳歳年年人不同。
 人生の感は花を見てますます繁く、雪を見ていよいよ多し。
 二千五百年以來、月・雪花三つの眺を有し得たる我等が祖先
 の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に傳へたるよ、如何に多
 くの追慕を我等に催さしむるよ。(芳賀矢一「月雪花」)

二 櫻の日本上

花見といふ事が年中行事の一つとなつて、老幼男女貴賤
 貧富、打連れて花下に遊ぶといふ風俗は、西洋にも支那にも
 ない。全く日本獨特のことである。

蓋し世界に日本の櫻のやうに派出やかな花もなく、また
 日本人ほど花の好きな國民もあるまい。支那の桃李は専ら
 彼の國の詩人に歡ばれ、西洋の薔薇や草花は主としてその
 上流社會に玩ばれる。然るに日本では、花盛りの噂には其の
 日ぐらしの貧困者さへも浮かれ立つのである。朝日に匂ふ
 山櫻のやうな大和心は、畢竟その間から生れて來たのであ

敷島の大和心を
人とはば朝日に
匂ふ山櫻花(本
居宣長)

らう。
和歌は、千年の昔から、何よりもまづ月花を好題目として詠ぜられた。人類が未だ野蠻の域を脱しない時代に、我が大和民族のみは、既に櫻花の美にあこがれる風流心を有つてゐたのである。さりながら、遠い日本の上代には、まだ今日のやうに、到る處に櫻が繁つて居なかつたに相違ない。

(二)
萬葉集、太宰少
貳小野老の歌。

青丹（二）よし奈良のみやこは咲く花のにほふがごとく
今さかりなり

と謠はれた奈良の都こそは、名にし負ふ八重櫻も追ひ追ひに植ゑられたことであらうが、それにしても山城の新京のやうに、

(三)
古今集、素性法
師の歌。

見（三）わたせば柳櫻をこきまぜてみやこぞ春のにしき
なりける

といふ程の美しい都ではなかつたであらう。殊に花の名所として日本隨一の名ある吉野山にさへ、奈良朝時代には未だ櫻は一向なかつたらしい。吉野の歌は數へ切れぬほど萬葉集に見えてゐるが、ただ山川の美しい景色を反復してゐるのみで、とんと櫻は謠つてない。日本が櫻の國となつたのは、蓋し平安遷都以後のことであらう。

(四)
古今集、在原業
平の歌。

世（四）の中に絶えて櫻のなかりせば春のころはのど
けからまし

と業平卿の詠ぜられた頃、即ち平安朝の初期が、花見といふ

古今集、素性法師の歌。

千載集に出づ。

風俗の始めて盛になつた時代である。今日も櫻狩、明日も花見の宴と打續いた春の賑はしさ、なかなか心長閑に暮す日もないといふのは、最もよく花時の盛況を偲ばしめる。いつ迄か野邊にこころのあくがれん花し散らずば千世も經ぬべし

愛惜の心にひかれて、暮れるも知らず花の蔭に彷徨ふ様を謠つた歌は、眞にその數が知られぬほどである。まして咲くを待ち、散るを惜しんだ歌は、指を屈するに違がない。

一朝厭離の心を起して佛門に歸依しても、花（二）にそむこころのいかで残りけん棄てはててきと思ふ我が身に

と西行は自ら怪しんでゐる。花（三）にひかるる心は遁世の僧にも残つてゐたのである。

吹（三）く風を勿來の關と思へども道もせに散る山櫻かな（千載集）

徒（三）然草の作者、吉田兼好。

又、吹（三）く風をなこそその關と詠じた源義家や、花（三）や今宵の主（三）人ならまし」と謠つた平忠度は、武士ながら花を愛づる心は忘れなかつた。源平以後の戦亂の世にも、平清盛は西八條に花見の宴を張つた。南北朝騷擾の際ですら、田舎者は花の下に集まつて酒飲み歌を作ると兼好は記してゐる。況や足利時代の小康に遭つて、花見の盛であつた事は、謠曲や狂言によつてさへ歴歴と知ることが出来る。かくてこそ、かの關達な太閤の醍醐の花見といふ、前後無比の大觀櫻會が開かれたのである。

三 櫻の日本下

平安朝の花見風俗も、鎌倉室町のそれも、さして懸隔があつたとは見えぬ。時としては邸内の花見もあつたが、まづは野山に出て、花の下に筵を設け、辨當を開いて、終日、遊興に耽つた。それも多くは主なき花で、

古今集、素性法師の歌。

見^ミてのみやひとにかたらん櫻ばな手ごと^ニに折りて

家苞にせん

と謠はれた通り、或は小さい枝を冠にかざし、或は大きい枝を手折つて歸ることもあつた。でも、花を折ることを惜しんだ歌も甚だ古くからある。

古今集、讀人不知の歌。

折^ヒ取らば惜しげにもあるか櫻花いざ宿かりて散る
まては見ん

狂言の花折には、櫻の折られることを惜しんで、花見の客を禁じようとしてゐる。

近世、徳川期に入つては、久しき昌平につれて、花見はいよいよ盛であつたが、その初は頗る殺風景なものであつた。足利期の末には、鎗槍を擔いだお伴を連れて花見に出ることがあつたと見える。流石に戦國武士は花見にも武備を怠らぬやう心掛けてゐた。然るに泰平な徳川期になつても、なほ寛文の頃までは、小身者さへ、花見といへば態、槍持・鐵砲持などを従へて出たやうで、武器を携へて威風堂堂としかつめ

第四代家綱將軍の時代。
(1611—1641)

らしく練出す花見は、今日から思へば随分無風流極まつたものであつた。

併し、かかる風俗は久しいものではなかつた。やがて、御大身も草履取を従へたのみで、槍や鐵砲は花の山には見られぬやうになつた。これに代つたのが花見小袖の伊達模様で、男女ともに漸く華美を競うて、貞享・元祿の盛期には花の美も衣裳の美に氣壓されるやうになつた。かかる衣裳の美しさのみな



第五代綱吉將軍の時代。
(1687-1719)
(1687-1719)

美に氣壓されるやうになつた。かかる衣裳の美しさのみな

らず、歌舞・音曲も盛に演奏されて、春は男女打連れて花の下に踊り狂うた。その當時の或書物には、吉野山の淋しさを嘲つて、如何に花の盛りでも、木樵や山伏ばかりで、花見小袖も御馳走もない山櫻を、どうして花の名所といふべきぞと書いてある。元祿の花見は既に風流者のみの花見ではなくなつた。

吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬかたの花を尋ねん

と、道もない山陰を辿つて、淋しい花を眺めたのは既に昔の事で、東山・祇園或は清水の花の下蔭に暮うち廻して花毛氈を敷き、とりどりの遊興に、蒔繪の重箱に山海の珍味といふ

新古今集、西行法師の歌。

贅澤でなくては、花見らしくは感じなくなつたのである。
 憶ひ起せば、余が十代の頃には、近くは東山、遠くは嵐山に
 男女打連れての花見といへば、まづ大風呂敷の辨當は小者
 に提げさせ、男達は一瓢を携へつつ、ぞろぞろと朝早くから
 出かけたものである。麥島の間には蓮華、蒲公英の點綴する野
 路を辿つて十町も行く頃には、女達は着物の裾をかかげて
 子供等と摘草を始めた。男達は瓢箪の口を開く。雲雀や鶯に
 やや興を添へて、花の蔭に行きつくまでには、もはや半ばは
 春色に酔心地である。殊に十三参りといつて、今年十三にな
 つた子供を心ゆくばかり花やかに着飾らせて、花見かたが
 た嵯峨の虚空藏に参詣させる。それを親子兄弟が伴なひ行

く綺羅びやかな同勢が、太秦御室の邊を練りゆく姿は、今て
 もまさまざと見えるやうだ。その京染の華美を盡した友禪
 模様がやがて十三参りの特色で、又これが元祿の花見姿を
 宛らに傳へたものと言ふべきであつた。

四 保津川下り

浮かれ人を花に送る京の汽車は、嵯峨より二條に引返す。
 引返さぬは、山を貫いて丹波へ抜ける。予等二人は丹波行の
 切符を買つて、龜岡に降りた。保津川下りは、この驛よりする
 掟である。下るべき水は眼の前にまだ緩く流れて、碧油の趣
 をなす。岸は開いて、里の子の摘む土筆も生えてゐる。舟子は

*丹波國南桑田郡
 に在り。京都よ
 り六里。

舟を渚に寄せて客を待つ。

「妙な舟だな。」と友が言ふ。底は一枚板の平かに、舷は尺と水を離れぬ。赤い毛布に煙草盆を置いて、二人は好き程の間隔に座を占める。左へ寄つて居やはつたら大丈夫どす、波はかからしまへん。」と船頭が言ふ。船頭の數は四人である。眞先なるは二間の竹竿、續く二人は右側に櫂、左に立つ一人は同じく竿である。

ぎいぎいと櫂が鳴る。粗削あらけに平ひらげた檣の頸筋を、太い藤蔓に捲いて、餘る一尺に丸みを持たせたのは、兩の手にむんづと握るたよりである。握る手の節の隆きは、眞黒きは、松の小枝に青筋立てて、うんと搔く力の脈を通はせたやうに見える。

藤蔓に頸根を抑へられた櫂が、搔く毎に撓みでもする。とか、強つよきうなじを眞直まじくに立てたまま、藤蔓と摺れ、舷と摺れる。櫂は一搔毎にぎいぎいと鳴る。

重なる水の逼つて行く頭の上には、山城を屏風と圍ふ春の山が聳えて居る。逼りたる水は、是非なく山と山との間に入る。帽に照る日の忽に影を失ふかと思へば、舟は早くも山峽に入る。保津の瀬はこれからである。

「愈來たぜ。」と、友は船頭の體を透して、岩と岩との逼る間を半町の向うに見る。水はどうと鳴る。

「なるほど。」と、予が舷から首を出した時、船ははや、瀬の中に滑り込んだ。右側の二人は、すはと波を切る手を緩める。櫂は

流れて舩に着く。舩に立つは竿を横たへた儘である。傾いて



保津川下り

矢の如く下る船は、どどと刻み足に、船底に据ゑた尻に響く。壊れるなと思つた時は、もう走る瀬を抜けだしてゐた。

「あれだ。」と友が指す後を見ると、白い泡が一町ばかり、逆落しに噛合つて、谷を洩れる微かな日影を、萬顆の珠が我がちに奪ひ合つてゐる。

「壯なものだ。」と友は大いに御意に入つたらしい。併し船頭は至極冷淡で、ひたすら櫂を動かし來り、竿を操り去る。通る瀬は様様に廻る。廻る毎に、新なる山は當面に躍り出す。石山、松山、雜木山と數ふる邊を行客に許さざる疾き流は、船を驅つて、また奔湍に躍り込む。

大きな丸い岩である。苔を疊む煩はしさを避けて、紫の裸身に打當つて碎け散る飛沫を、春寒く腰から浴びて、綠崩るる瀬の真中に、舟こそ來れと待つ。舟は矢も楯も物かは、一途にこの大岩を目懸けて突當る。渦まいて去る水の、岩に裂かれたる向うは見えぬ。岩に突當つて碎けるか、捲込まれて見えぬ彼方にどつと落ちて行くか。舟は只まともに進む。

「當るぜ。」と友が腰を浮かせた時、紫の大岩は、早くも船頭の黒い頭を壓して突立つた。船頭は「うん」と舳に氣合を入れた。舟は碎ける程の勢で、波を呑む岩の太つ腹に潜り込む。横たへた竿を取直して、肩より高く兩の手が舉るとともに、舟はぐうと廻つた。突離す竿の先から岩の裾を尺も餘さず斜に滑つて、舟は向うへ落出した。

急灘を落ちつくすと、向うから空舟が上つてくる。竿も使はねば、權は無論の事である。岩角に突張つた懸命の拳を收めて、肩から斜に盲縞を掠めた細引繩に、長長と谷間傳ひを、根限り戻舟を牽いて来る。水行く外に、尺寸の餘地だに見出し難い岸邊を、石に飛び、岩に這うて、草鞋のめり込むまで、腰

を前に折る。だらりと下げた兩の手は、堰かれて注ぐ渦の中に、指先を浸すばかりである。うんと踏張る幾世の金剛力に、岩は自然と磨滅つて、引懸けて行く足の裏を、やすやすと受ける段段もある。長い竹を此處彼處と岩の上に渡したのは、牽綱を容易に且つ疾く滑らすための策だといふ。

「少しは穩かになつたね。」と、予は左右の岸に眼を放つ。踏む角も見えぬ切立つた山の遙の上に、鈍の音が丁丁と響く。黒い影は空高く動く。友も手を翳し、咽喉佛を突きだして峯を見上げ、まるで猿だ。とは言つたが、馴れると何でもするものだよ。と、別に感心したらしい顔付でもない。予は幾分、心に餘裕が出来て、此の流は餘り急過ぎる。少しも餘裕がない。のべ

つに曲つてゐる。だから處處にかういふ場處がないといけない。と言ふ。即座に友は、僕はもつと駛りたい。どうも先刻の岩の腹を突いて曲つた時など、實に愉快だつた。願はくは船頭の竿を借りて、僕が船を廻したかつた。と腕を撫す。君が廻せば、今頃はお互に成佛して居る時分だ。二人は哄笑する。

亂れ起る岩石を左右に繞る流は、抱くが如くそと割れて、半ば碧を透明に含む光琳波が、早蕨に似たる曲線を描いて、巖角をゆるりと越す。川は漸く京に近くなつた。

「その鼻を廻ると嵐山どす。」と長い竿を舷の内へさし込んだ船頭が言ふ。鳴る櫂に送られて、深い淵を滑るやうに抜けだすと、左右の岩が自ら開けて、舟は大悲閣の下に着いた。

(夏目漱石の「虞美人草」に據る)

五 清角の曲上

晋の平公の鹿祁宮ろくしきうの新に造營された時である。

楚の章草宮と輪奐りんげんの美を敢て競ふために、平公が曲沃の地、汾水の岸に建てさせたこの壯麗な樓臺の落成を祝賀するため、諸侯は使節を派した。中でも衛の靈公は、この祝賀と、それに彼が即位した時に受けた平公の訪問に對する答禮とをかねて、親しくその隣國晋への旅に上つた。

靈公の一行が濮水の河畔に來た時に、靈公は其處で一軒の旅舎に夜營を張つた。併し、どうしたのか、彼は夜が更けて

も眠れなかつた。寢はぐれた彼の耳に、ふと琴の音が響いて来るのであつた。彼は寢床の中に起きなほつて、枕に倚りかかつたまま耳を傾けた。音は極めて微かではあつたが、はつきり聽分けることが出来た。どの樂人も今迄にそんな曲を弾じたことがない。全く耳新しい曲であつた。そこで、彼は側の者どもを呼起して尋ねてみた。併しそれを知つて居る者は一人もなかつた。

生來音學を愛好した靈公は、涓といふ伶人を召抱へてゐた。よく新しい曲を作つて、聞く者に春と夏と秋と冬との心持を起させる四季の曲をさへ工夫することの出来た樂師である。それゆゑ、靈公は、此の伶人を寵愛して、その出てゆく

時には必ず彼を従へてゐた。

この夜も、靈公はお側の者に命じて、涓を召出させた。夜半にも拘らず、涓は直に伺候した。微かな音色はまだ止んではおなかつた。

「あれを聽いてみよ。この世のものとも思はれないではないか。」と靈公に言はれて、涓はちつと聽入つた。暫くすると、聲は聞えなくなつた。涓が言ふに、仰の通りでございます。曲の名は私も存じません。併し、私はあの曲のあらましを知ることが出来ました。今一夜聽くことさへ叶ひますれば、私はあの曲を寫し取りも致しませう。」

靈公は更に一夜を其處に逗留した。夜半になつて、再びあ

の聲が響き出した。涓は琴を把つて、遂にその美しい曲を完全に自分のものにするまで習ひ覺えた。

かくして彼等は晋に着いた。祝賀と恭順との辭を述べて、儀式も終つた時、平公は鹿祁の樓臺に宴を張つた。十分に杯を斟みかはした頃に、平公が話しかけた。

「御國には涓とかいふ偉い伶人がゐて、新しい曲を彈ずるといふ尊を豫て聞いて居りましたが、今度の御一行にはお連れになりましたか。」

「はい。來て、この樓の下に居ります。」

「私のために、此處へその人をお召し下さるわけにはまゐりませうまいか。」

この請に應じて、靈公は直に涓を召した。涓は召されて樓の上に現れた。平公はそれと同時に、自身の伶人である曠を召出した。曠は盲であつたから、手を引かれながら現れて來た。二人の伶人は階の前に身を伏せて、二人の王を拜した。平公は曠を側近くに、涓を曠の側に坐らせてから、涓に向つて言つた。

「近頃どんな珍しい曲が出来ましたらうかな。」

そこで涓が申し上げた。この度の旅の途すがら、些か聞覚えませんでした所もないでは御座いません。若しお耳の穢にもと、琴をお持たせ下さいますならば、過分に存じます。」

平公は側の者に命じて席を設けさせ、古い立派な琴を取

出させて、それを涓の前に置かせた。涓はまづ其の七本の絃の調子を合せて、さて愈彈じ始めた。すると、ほんの幾聲かを聞いただけで、早くも平公はその旋律を歎賞した。然るに、その曲がまだ半ばにも到らないうちに、かの盲の伶人は、急に自分の手を涓の琴絃の上に置いて、

「お止めなさい。國家没落の調はお弾きなさらぬが宜しい。」
「どうしたといふのか。」と平公は鋭く訊ねた。

曠は答へた。前朝の末に、延と申す樂人が、王の爲に節度のない曲を作り出したので、御座います。その曲こそ今聴くこの調で御座います。紂王はこの曲に聽入つて、日頃の徒然を忘れて居られたので、御座います。武王が紂を討滅ぼした時

延は琴を抱いて東の方に落延びましたが、濮水に投じて死にました。あの河の畔を、樂を愛する者が過ぎると、今でもその曲は水底から響いて來るので、御座います。涓が途すがら聞いたと致しますれば、それは、きつと濮水の畔であつたに相違ござりませぬ。」

靈公は胸にこたへて驚いた。併し平公は言つた。亡びた國の曲を彈くからと言つて、何の心配があるか。」

「いいえ、みだらな唄聲は國を亡ぼします。そんな不吉な調は彈くべきでは御座いません。」と曠は答へた。けれども平公は聽かなかつた。私は耳に新しい曲が好きなのだ。涓よ、その調を終まで聽かせてくれ。」

六 清角の曲下

涓は再び絃の調子を整へて、その曲を弾じ終へねばならなかつた。彼の技は人の心の鎮靜と昂揚との姿を描き出した。深く氣に入つた平公は、曠に問うた。

「この曲は何といふ名か。」

「清商の曲と申します。」

「この清商の曲こそ最も悲しい曲であらうな。」

「いいえ、清商は悲しいには相違ございませぬけれども、清徵の曲には及びませぬ。」

そこで平公は言つた。その清徵の曲を聴くことは出来な

いものか。」

「いいえ。」と曠は答へた。清徵の曲を聴く事の出来るのは、古代の徳の高い君王達ばかりで御座います。只今の徳の寡い君王達は、多分はその曲は聴かれますまいかと存じます。」

「しかし、私は耳に新しい曲が甚だ好きなのだ。拒むことはならぬ。」

かう平公に言はれては、流石の曠も琴を把るより他はなかつた。最初の一節を奏でると、玄い鶴の一群が南から飛んで来て、宮殿の門の棟に集まつた。數へて見ると八つがひ居つた。曠が更に曲を進めて第二節に入ると、その時すべての鶴は一樣に啼きながら飛びたつて、樓臺の階の下へづらり

と並んでとまつた。右と左とに各、八羽づつ對ひ合つてゐた。第三節では鶴は頸を延ばして歌つて、羽搏きして舞うた。聲は空高く響いて、銀河にまで達したかと思はれた。平公は大仰な悦で手を拍つた。座中の客も悉く歡聲をあげた。樓臺の上に居る者も下に居る者も歡樂で湧返つた。

平公は世にも稀なることと稱讚して、白玉の卮に美酒をなみなみとつがせてから、それを手づから曠に與へた。曠は君王の側近く進んで恭しくそれを頂いた。それから平公は感歎の深い息を漏しながら言つた。

「音楽で、この清徵の曲を上越するものは、もう有り得よう筈はあるまい。」

「ところが、御座います。清角の曲で御座います。」

曠のこの答を聞いて、深い驚歎を發した平公は、「おお、清徵にも優る曲があるといふのか。お前は何故それを聴かせないのだ。」

曠は徐に長長と答へた。清角の曲は清徵とは比べ物にはなりません。それ故に私はお聴かせ申さないの御座います。太古の天子黄帝が、泰山の頂に魔神と幽鬼とを呼集めました。天子みづからは象の車を召し、鰐と龍とにそれを曳かせ、その鰐と龍とは神の中の勇士たる畢方と蚩尤とが手綱を把つたので御座います。風伯が天子の行くての塵を清め、雨師がその道に水を撒き灑ぎました。虎と狼とが道の前駈

をして、諸の魔神と諸の幽鬼とが御召車の後に従ひました。道には大蛇どもが横たはり、不死鳥が空を覆うてゐました。このやうな、あらゆる魔性が集合して出来たのが清角の曲で御座います。この曲が作られて後の諸の君王は、徳の光が自づと薄れて行つて、もはや悪魔どもを照し従へる力はなくなつて了ひました。さうして悪魔どもの世界と人間の世界とは分つ事が出来なくなりました。それゆゑ、若しその曲を弾ずる時には諸の魔神・幽鬼が轟きながら集まつて、きつと不祥な事が起り、幸福は影を潜めるので御座います。」

平公は、併し叫んだ。私はもう年老いて居る。是非ともその清角の曲を一度は聴きたい。そのためには、私は命を失つて

も悔いない。」

曠は、無論、強くそれを拒んだ。が、平公は遂には立上つて、幾度かそれ強ひた。それ以上には抗する事の出来ぬ曠は、とうとう琴を把つた。弾じ始めた。第一節には黒雲が西の空から襲うて來た。ところが第二節にかかつた頃、俄然として烈しい疾風が起り、帳や幕を引きちぎり、盃や皿を吹飛ばした。瓦は飛ばされ、宮殿の圓柱は折れて挫げ碎けた。迅雷が轟き、閃電は絶間なく、豪雨が襲ひ、樓臺の上には數尺の水が溜り、樓臺の中は忽に大瀑布の直下に置かれたやうになつた。侍臣達は度を失つて迷惑つた。平公と靈公とは怖れ顛へつつも、傍の一室の扉の陰に隠れてゐた。

間もなく豪雨と暴風とが止んで、次第に集まり歸つた侍臣達は、樓上に昇つて來て、辛うじて二王の身を支へて樓臺から降りさせた。併し平公はその夜から病の床に臥し、久しからずして死に襲はれた。靈公は平公に比べれば軽くはあつたが、それでも心身の平安を失ひ、大急ぎで自分の國に歸つて了つた。(佐藤春夫―玉簪花)

七 由良の思ひで

春の夜は靜に更けぬ
はゆま路の並木のけぶり
箱馬車は轍をどりて

宮津より由良へ急ぎぬ

朧夜の窓のあかりに
京むすめ難波あきうど
朽尼や切戸まうてや
人の世の旅の道づれ

物がたり欠伸まじりに
眠り日のとろむとすれば
誰が子にかしりへの方に
をりからの追分節や

清らなる聲ひとしきり

溪あひの水のせぜらぎ

咽び音に響きわたれば

乗合は涙こぼしぬ

その後や幾春へけん

おほかたは夢に現に

しのびては得こそ忘れね

由良の夜の追分上手

その子いま何處にあらん

思ひての清きかたみや

人人のところに生きて

とことばに姿ぞわかき (薄田泣菫一二十五絃)

八 山紫水明

山紫水明の語はよく京都の景色を言ひあらはせり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむるものなるを知らば、三面を山にして土地濕潤、水分を含むこと殊に濃かなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明かなるべし。

嘗て一夏を北陸の海岸に送りしことありき。一日驟雨の至るを見る。疾風さと吹き、浪俄に高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なり重なりて海を覆ふ。波の音は雲の中にある。電光閃閃、磨る墨の雲間に火花を散らす。波か雷か、世界はただ一暗黒の中に没し去るかと思はれて、凄じかりき。かくの如き壯絶なる景は、わが數年の滯留中、遂に京都にては見ることを得ざりさ。

されど下京より吉田に通ひたる朝な朝な景色は、今にも依稀として眼前にあるを覺ゆ。引渡す霞に、三條の大橋の擬寶珠の一つ一つ彼方へ彼方へと薄れゆきて、向うに寝たる東山は有るか無きかの夢より未だ覺めやらす。吉田の岡

*蒲團着て寝たる姿や東山(嵐雪)

に並び立てる松は墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は隠れて、聲ぞまづ朝靄の中より漏れ來る。時雨の景色の又よその國には見られぬ様よ。愛宕の峯を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、はらはらと面を撲つ。あはやと驚きも果てず、雲は走りて直に東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かかる優しき景色は山河襟帶の平安京の特色なり。

等しく温帯の地なりといへども、大陸の内部にありては、寒氣凜凜たる冬期は直に烈日赫赫たる夏期となり、氣候激變して、その間に和煦の時季を見ず。海岸は温暖なるところ多きかはりに、年中春の如く秋の如くにして、夏冬の峻酷な

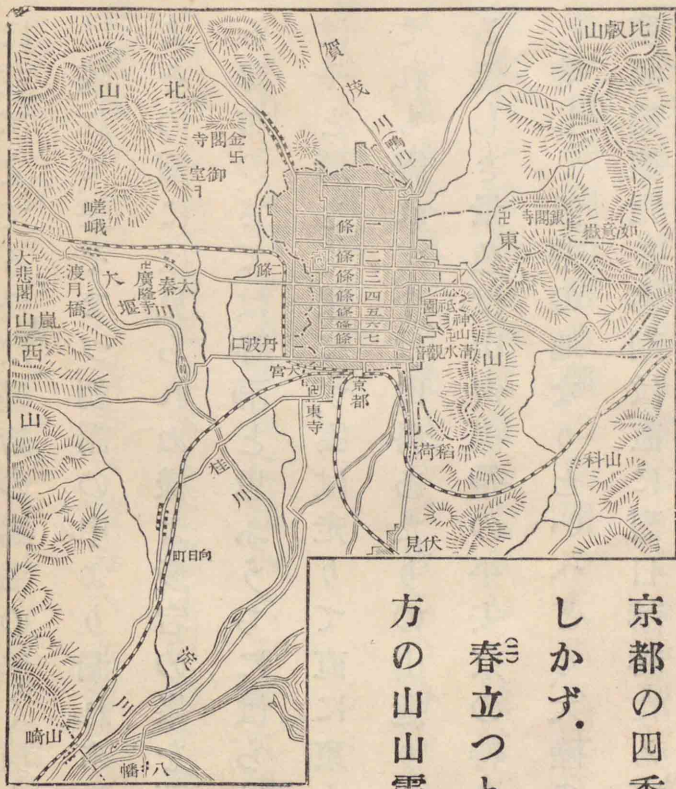
見渡せば花も紅葉もなかりけり
浦の苫屋の秋の夕ぐれ(新古今集、藤原定家)

春立つといふばかりにやみ吉野の山も霞みて今朝は見みゆらん(拾遺集、壬生忠岑)

る風物を感じず。四季交代の順序の明かなること、わが國の如きは鮮く、わが國にても花も紅葉もなき浦曲などは、到底

しかず。
京都の四季の眺の面白きに

春立つと思ふばかりに四方の山山霞こめ、空の色、水の色さへ昨日に變りて覺ゆ。若菜摘み、小松曳くも、新しき年のしるしなり。梅の花散り



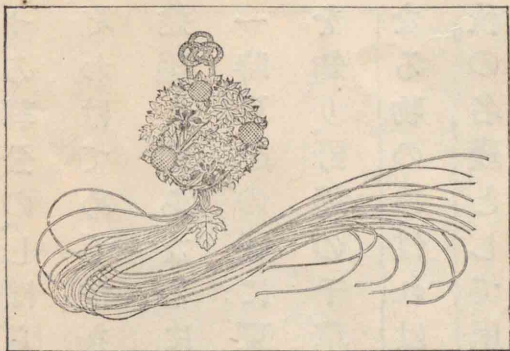
りて覺ゆ。若菜摘み、小松曳くも、新しき年のしるしなり。梅の花散り

六月晦日に行ふ大祓。

て鶯老を啼けば、柳の緑、桃の紅、花のおとづれあわただしく、夢かとはばかり青葉となりぬ。垣の卯の花、花橋を過ぎがてにする郭公の、しばらくして聲もせずなりぬるは、時知りぬるぞわけてめてたき。五月雨に軒の玉水ひまなく、公事物詣も途絶えがちなるに、霽るればやがて暑さの凌ぎ難き、それも一時、夏越の祓に夏も終りぬ。涼風たちて一葉の落つるに秋を知り、野邊の千草、蟲の聲、月影さへも隈なくて、とりどりなる物のあはれは此の頃ぞまさされる。千入に染むる紅葉を秋の名残として、風騒しく、淋しき冬の霜に痛み、雪に慰みて、早くも年は暮れゆきぬ。

愛すべき山川の懷に涵養せられたるわが國民は、永く薫

白馬(二月七日)
上巳(三月三日)
端午(五月五日)
七夕(七月七日)
重陽(九月九日)



玉

育の恩を忘れずして、自然を思ふこと深く、わけて四季の景物の變遷に注意せしこと平安朝の如く著しきはあらざるべし。代代の撰集の部を分つや、四季は最も重んぜられたり。花や、月や、その折折ごとに合奏歌合は絶えず。この時代より盛なりし五節句も、起源は多く支那にあるべしといへども、よく國風に融化し、又よく季節に調和したる遊樂なり。白馬の節會は勇しく神神しく、曲水の宴の上巳の節となりたるもやさしく、端午は第一に盛にして、淀野にひきし菖蒲の根を競ひ、軒に蓬を葺けば藥玉

の簾にかかりたるも興あり。夕の空の澄みわたる頃、銀河を隔つる二星を仰ぎて、鵲の渡せる橋をおもひ、重陽には菊花の秋に驕れるを愛して、吟誦夜を覺えず。近世に至りて、算盤弾く丁稚、剃刀片手の下剃までが、梅咲くや、初雪やなど首をひねりしは、自然を愛する國民固有の本性の然らしめたるなりとはいへ、また一には、千年以來の祖先が折折の景色に憧憬せし結果なりと言はざるべからず。

社會の進歩するに従うて、人工を以て自然に反抗する力は増加す、これやがて文化の恩澤なり。今日開明の民は、煉瓦の家屋風もすかさず、室内の煖爐春とこしなへなれば、何處にか朔風のすさぶを知らん。夏は山地綠蔭深き處、海岸風涼

しき處に暑さを避く。都會の住居軒たち續きては、月の盈ち虧け、星影の動くも氣づかず。たとへば東京の子供の、山といへば飛鳥山の外を知らず、杉はと聞けば削れる板とのみ思へる類多し。

平安朝の京都は未だかくの如く人口稠密ならず、文化進歩せず。隨うてその住民も人爲の力を以て自然を左右せんとする程の慾望を有せずして、却て山川の美に憧憬せる本性は、飽くまでこれに同化せんと試み、服飾の色彩、第宅庭園の配置、一に自然を模範に取る。平安人士の行動の、いかに美はしく平安京の山紫水明と融和して、天人相映發せるかを見よ。人力を能ふかぎり活動せしめ、鬼神を役して自然を己

が用に供せしむるは、かれの事にあらず。自然は人間に近づかずして、人間は自然に近づけり。かれらは工業を知らず、科學を知らず、人力の偉大なるを知らず、ただ自然に屈從せり。屈從せるにあらず、愛着せるなり。その愛着せるや、勞働に餘念なき蟻の如くならずして、青天の下に吟哦する雲雀の如し。月卿・雲客、生活の苦痛を知らず、運輸の便に乏しき京都の地勢にも不足を感じず、只景色の美にあこがれて、烏兔匆匆四百年、政治の實力はいつしか出でて關東に去りぬ。京都は實務の地にあらずして風流の地なり。平安朝は實務の時代にあらずして風流の時代なりき。(藤岡東圃「國文學全史」)

九 鎮守の森

満目蕭條として、田も畑も霜枯の風情見るかげもなき間に、一むらこんもりとして緑鬱蒼たるものは鎮守の森なり。金も石も燦けんばかりの夏の眞晝中に、一陣の涼風殿角より起りて、社前の注連繩さらさらと鳴れば、ここは子守田夫等の安樂世界となりて、拜殿に晝寐の夢は圓かなり。春のあしたには、祠前一二株の彼岸櫻咲きこぼれて、一村に花信を傳へ、秋のゆふべには、社後の蔦蘿、紅を染めて、夕日の色もまばゆし。花朧なる曉月明き夜、松杉暗くして、瑞籬のほとり神さびたり。詩趣獨りここに饒かにして、何事のおはしますかは知らねども、神神しく覺ゆるなり。

何ごとのおはしますか
は知らねども
かたじけなさに涙こぼるる
(西行法師)

日落ちて月漸く上るとき、涼を求むる村人の影婆娑として、鎮守の森は舞蹈場と化するなり。祠頭の旗幟翩翩として、風に靡くとき、満村の老幼織るが如く、鎮守の祭禮は、一歳中、復と得がたき歡樂なり。年豊かなれば詣り謝し、天旱すれば雨を乞ふ。洵に鎮守の森は一村の望を集め、一郷の中心として、神聖なる、しかも面白き所たるなり。

かかる鎮守の森にいます神は、多くはその土地その土着の民と何等かの關係あり。溯つて之を考ふれば、氏族部民がその祖先を祀りたるものも少からずして、社格は郷社、村社などなるが、官幣、國幣の大いなる神社も、畢竟鎮守の森の大いなるものに他ならざるなり。鹿島香取の神宮は武甕槌神。

官幣大社。常陸國鹿島町。
官幣大社。下總國香取町。

(*) 國幣中社。下野
國字郡宮市。

經津主神の子孫が創めたる所にして、宇都宮の二荒神社は毛野君の一族がその祖先を祀れる所なるべし。その一層大いなるものには出雲大社あり。その最も大いにして日本の鎮守たるものには、五十鈴川の上に宮柱太しく建て、千木高しれる伊勢大神宮もあらせ給ふなり。
小にしては一村の中心となり、大にしては帝國の中心となる。祖先の神靈、前賢の英魂は、長へに鎮守の社に留まりて、子孫、後人の精神に通ひ、彼等をして奮勵、自彊せしむるなり。天佑神助の信仰は勇氣鼓舞の最良法なり。しかも信仰とは權道にあらず、方便にあらずして、直に神に接し、靈に感ずる唯一の法なり。

祖先崇拜なるかな。これひとり原始の觀念のみにあらず。祖先の勳功は後人奮勵の料たり、子孫の向上心を發揮すべき興奮劑たり。ただ其の崇拜をして保守的たらしむる勿れ、回顧的たらしむる勿れ、進歩的たらしめざるべからず、自覺的たらしめざるべからず。

ここに於てか鎮守の森をして、一層、一村、一郷の中心たるの實あらしむべきなり。更に神さびて神靈の窟たるに適せしむべきなり。これが爲には苗樹を植ゑ、草萊を去り、祠宇を修め、園池を美にすべし。一村、一郷の崇敬地たらしめ、遊樂地たらしめ、集會所たらしめ、心なき田夫にも美の觀念を與ふる所、村人の誇とする所、他郷に在りても猶戀戀の思あるべ

き所たらしむべし。小學兒童の運動會も、これを中心としてこの附近に行はしむべし。ささやかなる村落圖書館の如きも、此のほとりに設けらるれば最も妙なるべし。鎮守の森をして一村一郷の中心たるの實あらしむるは、蓋し風化の上に得る所極めて大いなるものあらん。(笹川臨風)

一〇 オリンピアの回顧

オリンピアのゼウス神は希臘全土の信仰を得た神である。四年に一度の祭日には、南は亞弗利加のシリーン、西は伊太利のシラキユース、東は小亞細亞のあたりまで、苟も希臘人の住んだ處からは、幾千幾萬の人人が集ひ來たのである。

(一) Zeus. (二) Cyrene. (三) Syracuse. (四) Olympia. ヲロポンネサスのアルフエウス河畔。

オリンピアの廢墟の奥に、一部分のみ發掘された演技場の址は、彼等が一世の晴の場處であつた。今はその入口に蔦葛が高く繁り合つて、羅馬時代に建てた凱旋門の半ば壞れたのに纏はつてゐるのが、如何にも名譽の月桂冠であるかのやうである。

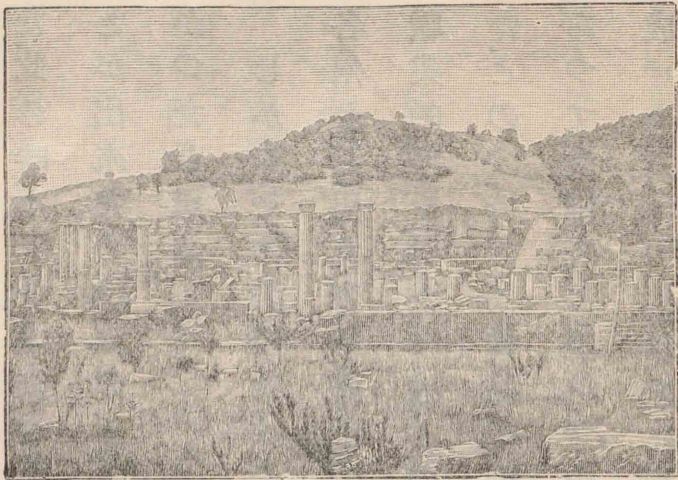
この大演技は四年目毎の大祭日に催された。此の日は神聖なる平和の日として、希臘全土の人人が敵身方を忘れて、これに列したのである。希臘全土の一致結合は、このオリンピアの演技によつて出來たといふも過言ではない。國民全體が面白く愉快にここに集まり、各州の選士が雲を呼び風を起して、龍虎相搏つたのは、如何に壯快に且つ目覺しかつ

(→) Herodotus.
(-B.C.460?)
(→) Demosthenes.
(B.C.484?-424?)
(→) Themistoles.
(B. C.385?-322)

た事であらう。

集まつて来た人人の中には、詩人もあつたであらう、學者もあつたであらう。ヘロドトスの如き歴史家も、デモステネスの如き雄辯家も、テミストクレスの如き勇將も、さては政治家、法律家、富めるも貧しきも、名門も平民も、あらゆる階級あらゆる職業の人人が互に顔をあはせ、談笑周旋、この間を逍遙した様の、如何に面白く且つ賑かであつたらうか。

若しここに名工があつたとせよ、彼の靈腕はこの群集によつて得る所がなかつたであらうか、人生を研究する好機、人間を捕ふる機會は、彼等の決して逸しなかつた所であらう。想ふにこの演技は單に演技そのものの進歩のみを來し



オ リ ン ピ ア 舊 址

たのではない。哲學、歴史、戲曲、音樂、彫刻などの發達に影響したことも尠少ではなかつたのである。

この祭の日には市場が立つことになつてゐた。物資の交換、賣買が如何に全國の商業、農業を裨益したことであらう。斯くして思想、知識の交換、延いては感情の融和が、暗暗裏に國民の一致團結に貢獻する所があつたと同時に、商工業等にも影響したものが多かつたのであ

る。彼等はヘルシヤ戦争に於て、國民的敵愾心の絶頂に達した。此の時、小忿を忘れて大敵に當り、よく東方の強を挫くことが出来たのは、このオリンピアの演技に負ふ所が少くなかつたと思ふ。

しかもその演技者は決して職業的の者でなかつた。ただ各州から出た青年選士であつた。そして羅馬時代に入つて職業的となつた時は、この演技のはや衰へ始めた日であつた。この演技の精神は、全國民をして眞の勇者たらしむるにあつて、全國民の體格意志の發達は、この演技によつて益助成せられた。古代希臘に於ける教育のモットーは一言で盡きる。曰く、健全なる肉體には健全なる精神宿る。これである。

(→) Motto.

ただこの健全なる精神を養成せんため、健全なる肉體を作るに苦心したのである。希臘の彫刻にはこの意味が現れて居る。希臘の文學にもこの意味が見えて居る。

オリンピアの祭典は、かくて希臘の歴史はじまつて以來、永く國民的祭典として羅馬時代まで連続した。その事蹟は希臘の文化と共に、永久に亡びることがないであらう。

我が國には、このオリンピアの演技の如きものは無用のことであらうか。我が固有の武術にせよ、ベースボールにせよ、フットボールにせよ、素人相撲にせよ、各階級を通じ、各地方を通じ、擧つてその選士を出して、龍攘虎搏の壯快なる競技を演ぜしめ、之を觀る者もまた全國到る處から雲集する

(→) Base-ball.

(→) Foot-ball.

事の出来る一の演技場の無いのは、盛世の一大遺憾ではなからうか。余偶、オリンピアに遊び、雷雨を衝いてゼウス神殿の廢墟に詣で、雜草蓊蓊たる演技場を目撃して、古希臘の文化の淵源する所ここに在りと想到したとき、余の心耳に囁く天來の聲があつた。それは、我が國民の崇敬し、信仰する伊勢神宮に一大演技場を設け、その大祭日に全國民の競技を演ぜしめよ、といふのであつた。(黑板勝美)

一一 蜘蛛の絲上

或日のこととございます。お釋迦様は、極樂の蓮池の縁を一人てぶらぶら歩いてお出でになりました。

池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうに眞白で、その眞中にある金色の蓋からは何ともいへない好い匂が絶間なくあたりへ溢れて居りました。極樂は丁度朝でございます。

やがてお釋迦様はその池の縁にお佇みになつて、水の面を蔽つてゐる蓮の葉の間から、ふと下の様子を御覽になりました。

この極樂の蓮池の下は、ちやうど地獄の底に當つて居りますから、水晶のやうな水を透きとほして、三途の川や、針の山の景色が、まるで覗眼鏡を見るやうに、はつきりと見えるのでございます。

すると、その地獄の底に犍陀多といふ男が一人、外の罪人と一緒に蠢いてゐる姿がお目に止りました。

この犍陀多といふ男は、人を殺したり、家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大悪人ではございますが、それでも、たつた一つ善いことをした覚えがございます。と申しますのは、或時この男が深い林の中を通つて居りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。

そこで犍陀多は、早速、足を舉げて踏殺さうといたしました。たが、いやいや、これも小さいながら命のあるものに違ない。その命を無闇にとるといふことは、いくらなんでも可哀さうだ。と、かう急に思ひ返して、とうとう其の蜘蛛を殺さずに

助けてやりました。

お釋迦様は地獄の様子を御覽になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのをお思ひ出しになりました。さうして、それだけの善い事をした報には、出来る事なら、此の男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。ふと傍を御覽になりますと、幸に、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹、美しい銀色の絲を懸けて居りました。

お釋迦様はその蜘蛛の絲をそつとお手にお取りになりました。さうして、それを玉のやうな白蓮の間から、はるか下にある地獄の底へ眞直にお下しなさいました。

こちらは、地獄の底の血の池で、外の罪人と一緒に浮いたり沈んだりしてゐた健陀多でございます。

なにしろ、どちらを見ても眞暗で、たまにその暗闇からぼんやり浮上つてゐるものがあると思ひますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、その心細さと言つたらございませぬ。その上、四邊は墓の中のやうにしんと静まり返つてゐて、たまに聞えるものといつては、ただ罪人たちが吐く幽かな溜息ばかりでございます。これは、此處へ落ちて來るほどの人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れはてて、泣聲を出す力さへもなくなつて居るのでございました。

ですから、さすが大悪人の健陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかかつた蛙のやうに、ただ蜿いてばかり居りました。

一一一 蜘蛛の絲下

ところが、或時のことでございます。何氣なく健陀多が頭を擧げて血の池の空を眺めますと、そのひつそりとした闇の中を、遠い遠い天の上から、銀色の蜘蛛の絲がまるで人目にかかるのを恐れるやうに、一筋細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて參るてはございませんか。

健陀多はこれを見ると、思はず手を打つて喜びました。そ

の絲に縋りついて、何處までも登つて行けば、きつと地獄から脱出されるに相違ございません。いや、うまく行くと、極樂へ這入ることさへも出来ませう。さうすれば、針の山へ追上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもある筈はございません。

かう思ひましたから、韃陀多は早速その蜘蛛の絲を兩手でしつかりと攪みながら、一所懸命に上へ上へと手繰りのぼり始めました。固より大悪人の事でございますから、かういふ事には昔から慣れきつてゐるのでございます。

併し、地獄と極樂との間は、何萬里となく隔つてゐるものですから、いくら焦つて見たところで、容易に上へは出られません。ややしばらく登る中に、流石の韃陀多もとうとう草臥れて、もう一手操りも上の方へは登られなくなつて了りました。

そこで、仕方がございませんから、まづ一休み休む積りて、絲の中途にぶらさがりながら、遙に下の方を見降しました。すると、一所懸命に登つた甲斐があつて、先刻まで自分が浮きつ沈みつしてゐた血の池は、今ではもう何時の間にか闇の底に隠れて居りました。それから、あのぼんやり光つてゐた恐しい針の山も、ずつと足の下になつて了りました。この分て登つてゆけば、地獄から脱けだすのも存外わけがないかも知れません。

健陀多は両手を蜘蛛の絲にからみながら、地獄に墮ちてから何年にも出したことのない大きな聲で、「しめた、しめた。」と叫んで、さも氣持よささうに笑ひました。

ところが、ふと氣がつかますと、蜘蛛の絲のずつと下の方には、數限もない罪人達が、自分の登つて來た後をつけて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へ上へと一心に攀登つて來るではございせんか。

健陀多はこれを見ると、驚いたのと氣味が悪いのとで、暫くは馬鹿のやうに大きな口を開いたまま、眼ばかり動かし、て居りました。自分一人でさへ斷れさうな此の細い蜘蛛の絲が、どうしてあれだけの人數の重みに堪へることが出來

ませう。若し萬一途中で斷れるやうな事がありましたら、折角ここまで登つて來たこの肝腎を自分までも、もとの地獄へ逆落しに落ちて了はなければなりません。そんな事があるつたら大變でございませぬ。

が、さういふうちにも罪人達は何百となく、何千となく、眞暗な血の池の底からうようよと這上つて、細く光つてゐる蜘蛛の絲を、一列になりながら、せつせと登つて參ります。今の中にどうにかしなければ、絲は眞中から二つに切れて落ちてしまふに違ありません。

そこで、健陀多は大きな聲を出して、「こら、罪人ども、この蜘蛛の絲は俺のものだぞ。お前達は一體誰の許を受けて登つ

て來た。下りろ、下りろ、と喚きました。

その途端でございます。今まで何ともなかつた蜘蛛の絲が、急に犍陀多のぶらさがつてゐるところから、ぶつりと音を立てて斷れました。

ですから、犍陀多もたまりません。あつといふ間もなく、風を切つて獨樂のやうにくるくるまはりながら、見る見る闇の底へ眞逆様に落ちて了ひました。

後にはただ極樂の蜘蛛の絲がきらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れさがつてゐるばかりでございます。

お釋迦様は極樂の蓮池の縁に立つて、この一部始終をぢ

つと見て入らつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のやうに沈んで了ひますと、悲しさうなお顔をなさりながら、またぶらぶらとお歩きになりました。

自分ばかり地獄から脱けださうとする犍陀多の強慾な心が、さうしてその心相當の罰を受けて、もとの地獄へ落ちて了つたのが、お釋迦様のお目から見ると、淺ましく思し召されたのでございます。

併し、極樂の蓮池の蓮は少しもそんな事には頓着いたしません。その玉のやうな白い花は、お釋迦様のおみ足のまはりにゆらゆらと蔓を動かして居ります。そのたんびに、眞中にある金色の蓋からは、何ともいへない好い匂が、絶間なく

あたりに溢れ出ます。

極樂も、もうお午に近くなりました。(芥川龍之介「傀儡師」)

一三 白き花

花癡といふ言葉支那にあり。わが國の俚諺にも「阿呆の花好き」といふ。われは淺ましくも小ざかしく生れ來てかの生れながらに聖暗の雅徳を具へ得たる人に劣れるを歎けども、ただ花を愛する時、われも亦花癡に近し。されば千紫萬紅とりどりの中に、わきていかなる花を好むと問はるる時は、さて擇び惑ひて、終に「皆よし、彼等いづれも花なれば」とのみ答へん。されどなほ具に考へては、なべて五月の花こそわが

* Solomon.
(B.C.993-953)
イスラエルの王。



百合

心にはかなひたれ。五月の花の中にも白色なるもの一きは好しまことに、ソロモンの榮華もものかは。されど必ずしも百合とのみは言はじ。
あはれ北方人は知らざらん、わが故里の柑子の山さつき待つ花橘の香ぞめてたき。
さてはまた、淡月梨花正
斷魂「霏霏たる細雨のうちけふるにも散る梨花の風情も亦
殉情のあはれ深からずや。
卯の花もよし。

梔子の花もよし。わが父が蕙雨山房のはづれなる崖の一端に高く懸りて、靜に咲出でたる其の花ありき。今いかに。われは少年の頃、その崖を攀ぢて其の花を採り、「水車」「水車」と呼びて遊びたりき。

野茨の花も亦ゆかしさの極みなり。わが若き頃の詩に、

紀の國の臯月をかばは

椎の木の暗き下蔭

うす濁る流のほとり

野うばらの花の一むれ

云云といひて、この野花をやさしき心になぞらへたり。さても、わが詩は調べをのみ重んじて、またかの花のこころをし

も忘れしとは思はねど、ただかの花は小暗き椎の木蔭には咲かず。わが詩は繪そら事のみ細流行くところ、土橋のあたりに、徑に沿うて初夏の光あかるき方にこそあれ。花むらがりて香もゆたかに、花のなかより愛らしき蜂のうなり聞えたる夢心地のどかに、長條いと長きものは、その先端、折から水かさ増せる水の面に浸されて、流はためにせせらぎを生じ、枝みづからは戦き揺れて顛音の如し。

花＊いばら古里の路に似たるかを

口ずさみて趣ふかく、他奇を銜はずして、自ら此の花のなつかしく甘美なる面影をさへ傳へ得たるは心にくき句なり。さて何人の句なりしや、今さだかに覺えぬを憾とす。

興謝燕村の句。

五月の花のうち、薔薇のみは色赤きものこそ嬉しけれ。純白のもの、淡黄のもの、もとよりめてたからざるにあらねど、所謂高尚げに見ゆるところのみにて、可憐さ素直さはつゆ感ぜられず。

ああ、花を思へば好きかな、すべて田園の家。わが父祖の田園の家。懸泉・小堂をめぐりて皆花なり。身は他郷に流寓して、白日の夢は故園に通ふことしげしや。(佐藤春夫—暮春挿話)

一四 歸郷

停車場を出て
土産の買物の包を小脇に

無愛想無趣味な白茶けた道を
足ばやに汗になつて
とうとう此の丘の上に立つ

ああ緩かにうねる並木路のはづれ
高く青青と
海角に寄せて碎ける大波のやうな
一塊の森の頭
あれこそ私の住む村だ
何といふ美しい村だらう
何といふ木立に恵まれた村だらう

七月の夕暮の空は
薄紫の晶玉の清らかさ
朱鷺の抜け毛のやうに細い雲が
すらすらと
軽い模様を描いてゐる
私
私が其處の家に着く頃には
水の垂れさうなあの空へ
宵の明星がたつた一つ
びかりと

金の印璽を捺すのだ

さうすると

村中が柔かい深深とした蔭にみたされ

月見草と小川とだけが闇に浮き

家や庭などは

咲亂れた星の花の下で

ただ地上の小さな燈火の光ばかりに

なつて了ふだらう

其處へ歸つて

水を汲みあげ

汗をさらさらと流し去つて

さてこの包をひろげるのだ

嗚呼そのわが村わが家が

向うに見える(尾崎喜八)

一五 田園雜興

みづから世を避けて門を鎖すとはあらねど、片田舎に住めば、來り訪ふ者おのづから稀なり。東京の西郊、花園神社の傍、市街をはなれて一字の茅屋建てり、屋外凡そ千坪、前に

葡萄棚あり、後に竹林あり。梅や、櫻や、柿や、栗や、松や、檜や、椿や、楓や、無花果や、百日紅や、其の間に簇生す。四顧ただ木立を見て人家を見ず。環堵蕭然、何となく我が心に適する處なり。われ年來病軀を抱けり。我が志を伸ばさんには、まづわが體の健康を復せざるべからず。西郊の地、空氣新鮮にして、街上の塵埃到り及ばず。管にわが心に適するのみならず、亦わが體に適するを以て、居をここに定めぬ。都門より歸り來れば、滿園の綠樹笑つて我を迎ふ。稚兒飛び來りてわが手の風呂敷包に取纏る。例として土産の菓子あらんことを期するなり。さるにても、わが志業未だ緒に就かざるに、早くも三人の子の父となりぬること愧しけれ。

蒸しあつき夏の夕、涼臺を無花果樹下に移して、一家晚餐に團欒すれば、竹葉そよぎて涼氣自ら盤上に迸る。一鉢の飯、母と分ち、妻子と分ち、庭の雞と分ち、池の鯉と分つ。今ひとつ、一匹の犬いつも食時をたがへず來りてかしくまる。これ近隣の家に飼へるものなり。その主人、近頃、妻子を残して病死せり。喪家の狗の譬おもひ出されてあはれなるままに、殘肴を投與ふるを常とすれど、貧家の厨魚なきこと多し。馬鈴薯など與ふるに、ただ鼻先に嗅ぎたるのみにて、悄然として立去るこそ氣の毒なれ。

一泓の池水、二間四方に足らざるばかりなれど、清水湧出でて、流れて田に注ぐ。もとは朽木、中に満ちて、蛙やゐりもの

棲處となり、岸には雜草おひ茂りて見るかげもなかりしが、草を刈り、朽木を取りのけ、ゐりものを捕へ出すこと七八十に及び、水はじめて澄みて鑑むべくなりぬ。池邊に立ちて眺むるに、蛙、ゐりのみと思ひの外、長さ一尺ばかりの鯉魚ありて遊びめぐり、人の足音聞きては穴深くひそみゆく。大兒と中兒とこれを見て興がり、今少し鯉を入れよといふままに、十尾入れ、二十尾入れ、三十尾入れ、終に大小七八十の多きに及び。白や、緋や、黒や、碧水に一種の模様を畫き、或は集まり、我は散じ、時には水面に唸鳴し、時には空に躍る。かたばかりの欄干ある獨木橋上に立ちて、これを眺め、これに餌をやること、兒にとりてはこの上もなき慰みなり。

おぼつかなげに、とととと呼びて、雞に餌を與ふことも亦小兒が慰みの一つなり。家の四方に散在せる雞、この聲を聞きて喜んで來り集まり、先を争うて食ふ。雄三羽、雌七羽あり。種類も一ならず。就中シャモの雌一羽、最も慄悍なり。餌を貪ること最も甚しく、近寄るものの頭を嘴にてつつくさま、如何にも憎さげにて、他の雞恐れて敢て近寄らず。されども最大にして好き卵を生むは此のシャモなり。

われ平生物累なきことを期す。身には惜しき物を帶びず、家にも惜しき物を置かず、身邊の物品、すべて用を使ざるを以て足れりとす。一室の中、粗末なる机と書物との外には、又、他の物なし。雞、遠慮なくも座に上り來り、机上に立ちて啼く

ことあり。護謨靴はきて庭に遊べる小兒、いつの間、にやら靴のまま上り來ることもあり。されど雞上らば追ふべきものと心得て、おのれは靴のまま上り居りながら、兩手ひろげて雞を追ひだすもいとあどけなし。その末の兒は未だろくに口をきけぬばかりの年頃なり。母の乳に飽けば、をりをりわが机邊に來る。われ坐すれば兒も坐し、われ横になれば兒も横になり、われ書を開けば兒も書を開き、われ筆を執れば兒も筆を執る。あまりにおとなしきに不圖、こころづきて見れば、折角わが書きたる原稿を塗抹せることあり。

夕闇の端居に、裏の田より竹林を越して、二つ三つの螢飛來るを見て、あれ捕へてよと兒の言ふままに、之を捕ふれば、

蜀を望むのならばし、田に行きて多く捕へてよと請ふ。田に行けば螢多し。忽の間に數十匹捕へつ。にはかづくりの螢籠に入れて打興じたる兒等も、やがて蚊帳の中に入り、枕邊の螢光いよいよ涼し。

園中、兒を喜ばしむるものは梅の實なり、葡萄なり、柿なり、栗なり、無花果なり、筍なり、雞なり、鯉なり、蟬なり、蜻蛉なり。此等に對して兒は喜ぶ。喜ぶ兒を見ればただ嬉しきなり。慾もなし、名利の念もなし。沈思して自然に對すれば、初は其の愛すべきを覺え、終にその敬すべきを覺ゆ。自然の奥には何等かの神異の潛めるが如く思はる。而して小兒は人類の中にも、最も自然に近きものなり。よしや子を持つて未だ親の恩

は知らずとも、物のあはれは自ら知るべくや。

樂しき我が團欒にも、なほ人生七十古來稀一朶の愁雲たなびく。そは我が胃腸の病なり。母や齡古稀七十に近し。憂愁苦楚の中に數十年を送りて、われと相住むことも前後僅に十餘年に過ぎず。末年われと相住みて小康を得たるは、なほ一年中の小春日和の如きか。然るにわが病弱の身は、その小春日和をさへ時雨の空に變ぜしめんとす。母は常に我が病身なるを氣づかひ、わが食すくなきを心配す。さればこそ、親を思ふ心にまさる親ごころと詠じけめ。世に、子の病ばかり親の心を痛ましむるものなし。罪深きかな。抑、不孝の子なるかな。昔は廉頗廉頗老いてなほ用ひられんとして、強ひて健啖せりとかや。それは功名

親を思ふ心にまさる親心今日の
おとづれいかに
聞くらん(吉田
松陰)
趙の武臣。

ゆゑわれは親ゆゑに、強ひて餐を加へ、久しく絶ち居りし晝食さへものするに至りぬ。食すすむやうになりて嬉しとて、母の喜ぶさま見るにつけても、覺えず涙ぐまれしこと幾度ぞや。(大町桂月―桂月全集)

一六 をさな兒

陰曆五月十三日

こぞの夏、竹植うる日の頃、うき節しげき浮世に生れたる娘、愚にして、ものにさとかれとて、名を「さと」と呼ぶ。

今年誕生日祝ふころほひより、てうちてうちあわわ、天窓てんてん、かぶりかぶり振りながら、同じきほどの子供の風車といふものを持てるを、しきりに欲しがりてむづかれば、

とみにとらせけるを、やがてむしやむしや破つて捨て、露ほどの執念なく、直に外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつつ、それも直に倦みて、障子の薄紙をばりばりむしるに、よくした、よくした。と褒むれば、誠と思ひ、きやらきやらと笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうちに一點の塵もなく、名月のきらきらしく清く見ゆれば、また俳優わき見るやうに、なかなか心の皺を伸ばしぬ。また人の來りて、わんわんは何處に。と言へば、犬に指ざし、かあかあは。と問へば、鳥に指さすさま、口もとより爪先まで愛嬌こぼれて愛らしく、いはば春の初草に、胡蝶の戯るるよりも優しくなん覺え侍る。

このをさな兒、佛の守したまひけん、逮夜の夕暮に、持佛堂

に蠟燭照して、鈴うち鳴らせば、どこに居ても、いそがはしく
這ひよりて、早蕨の小さな手を合せて、なんむなんむと唱ふ
る聲しほらしく、ゆかしく、なつかしく、殊勝なり。それにつけ
ても、おのれ頭には幾らの霜を戴き、額にはしばしば波の寄
せくる齡にて、彌陀頼むすべも知らず、うかうか月日を費す
こそ、二つ兒の手前も恥しけれと思ふも、其の座を退けば、は
や地獄の種を蒔いて、膝にむらがる蚊を憎み、膳をめぐる蠅
を誹りつつ、あまつさへ佛の戒めし酒を飲む。折から門に月
さしていと涼しく、外にわらべの踊の聲のすれば、直に小碗
投げすて、片ゐざりにゐざり出でて、聲をあげ、手眞似して、嬉
しげなるを見るにつけつつ、いつしか彼をも振分髪のたけ

になして、踊らせて見たらんには、二十五菩薩の管絃よりも、
遙に勝りて興ある業ならんと、我が身につもる老を忘れて、
憂さをなんはらしける。

かく日すがら、男鹿の角の束の間も、手足を動かさずとい
ふことなく、遊び疲るものから、朝は日のたくるまで眠
る。そのうちばかり母は正月と思ひ、飯炊き、そこら掃きかた
づけて、團扇ひらひら汗をさまして、閨に泣聲のするを目の
覺むる相圖と定め、手かしく抱き起して、裏の畑に尿しよやり
て、乳房あてがへば、すはすはと吸ひながら、胸板のあたりを
打ちたたきて、にこにこ笑顔をつくるに、母は夜ごと日ごと
の苦しみも、家の内外のけがらはしさも、ほとほと打忘れて、

衣のうらの玉を得たるやうに撫でさすりて、一人喜ぶ有様なりけらし。

蚤の跡かぞへながらに添乳かな（小林一茶「おらが春」）

一七 俳句評釋

俳句の妙味は終に説明すべからず。されど字句の解釋はさまたげ難きにあらざ。今、初學のために二三の古句を解説し、併せて多少の批評を試むべし。

何事ぞ花見る人の長刀

去來

長刀をさしたる人の花見に出かけたるを咎めたるなり。花見とならば、嚴しき長刀をさして、群集の中へ出づるにも

芭蕉の高弟、向井氏。

及ぶまじきに、その無風流は何事ぞと嘲りたるなり。斯くの如き句は多少の理窟を含みざる故に、人の注意を引き、俗間に傳はり稱せらるれども、名句といふは必ずしも此の種の句に限らざるなり。

元日や晴て雀の
ものかたり
嵐雪

芭蕉の高弟、服部氏。



嵐雪筆蹟

布團着て寝たる姿や東山

嵐雪

これは、實景を知らぬ人にはその味を解し難し。試に京都に行きて、つくづくと東山を見るべし。低き山の近きに在りて、しかも頂の少しづつ高低ある處、恰も人が布團を被りて

寝たるに似たり。さればこそこの譬喩的の吟ありたるなれ。品のよき句にはあらねど滑稽と輕妙とを以て勝りたるものにて、容易に摹倣し得べからず。又この句につきては多くの人の氣づかさる特色あり。そは冬の季といふことなり。さすがの都も冬枯れて、見るものとして淋しく寒からぬはなきが中に、かの東山を見れば、これも春頃のなまめきたる様を失ひて、唯ひつそりと寒さうに横たはる處、布團うち被りて寝たると見れば、淋しさの中に多少のをかしみもありて、何となく面白う感ぜらるるなり。

芭蕉の高弟、榎本氏。

わが雪と思へば輕し傘の上

其角

普通には、

我が物と思へば輕し傘の雪

として傳はれり。されど、「我が物」としては甚だ俗なり。わが雪の方に従ふべし。意味は解釋するまでもなし。この句、斬新を以て賞すべし。若しこれを摹倣する者あらば、直に邪路に陥



其角筆蹟

ること必定なり。

わが事と泥鰯の逃げし根芹かな

丈艸

芹は春のはじめのものなり。芹摘にと手を出したれば、芹のあたりに居たる泥鰯の捕へられんとや恐れけん。あちら

芭蕉の高弟、内藤氏。

早乙女や子の啼方へうへて其角

に逃げ隠れたりといふ意にて、泥鰌を擬人にして軽くおどけたる處、丈艸の擅場なり。

世の中は三日見ぬ間に櫻かな

蓼^{*} 太

名高き句にて、世の人おほ方は知れり、誰にも解る句にして、而も理窟を含みたれば、世人には賞翫せらる。されど理窟を含みたるもの必ず善くはあらず。この句、格調頗る下品なり。俗には「三日見ぬ間の」と傳へたれども、やはり「見ぬ間に」の方よろし。の「とすれば全く譬喩となりて味少く、」に「とすれば」櫻が主となりて實景となる故に、多少の趣を生ずべし。

菊の香や奈良には古き佛たち

芭蕉

この句に於て、菊と佛とは場處の關係なし。必ずしも佛の

*
嵐雪の孫弟、大
鳥氏。

前に菊を供へたるにもあらず、必ずしも佛堂の傍に菊の咲きたるにもあらず。強ひて場處の關係をいはば、菊も古佛も共に奈良にあるまでの事なり。作者の奈良に遊びし時、恰も菊の咲く頃なりしなるべく、随つてこの句を以て奈良をあらはしたるなるべしと雖も、菊花と古佛との取合せは、共にさび盡したる處少しも動かぬやうに見ゆ。ここ作者の活眼といふべし。

時鳥啼くや雲雀の十文字

去來

時鳥は夏にして、雲雀は春なり。時鳥は春に啼かざれども、雲雀は夏も居るゆゑ、この句は夏季となるなり。時鳥は横一文字に飛ぶものにして、雲雀は上より下へ眞直に下るもの

なり。故に丁度雲雀の下る處を時鳥が横ぎりて、恰も十文字の如くなりたるをいへり。最も巧なる句なり。

(正岡子規「俳諧大要」)

一八 行列

ふと、机から眼を上げて、入口の方を見ると、書齋の入口の戸が何時の間にか半分あいて、廣い廊下が幅二尺ばかり見える。廊下の盡きる處は唐めいた手摺に遮られて、上には硝子戸が立て切つてある。青い空から、まともに落ちて来る日光が、軒端を斜に、硝子を透して、縁側の手前だけを明るく色づけて、書齋の戸口迄ばつと暖かに射した。しばらく目の照

る處を見詰めてゐると、眼の底に陽炎が湧いたかのやうに、うつとりした心持になつて来る。

その時、この二尺ばかりの隙間に、空を踏んで、手摺の高さ程のものがあらはれた。赤に白く唐草を浮織にした絹紐を輪に結んで、額から髪の上へすぼりと簞めた間に、海棠と思はれる花を青い葉ごと、ぐるりと挿してゐる。黒髪の地に薄紅の苔が大きな雫の如くにはつきり見えた。割合に詰まつた顎の眞下から、一髪になつて、ただ一枚の紫が縁までふわふわと動いてゐる。袖も手も足も見えない。影は廊下に落ちた日光を、するりと抜けるやうに通つた。後から、………

今度は少し低い。眞紅の厚い織物を腦天から肩先まで被

つて、餘る背中に筋違の笹の葉の模様を背負つてゐる。胴中



にただ一葉、消炭色の中に取残された緑が見える。それほど笹の葉の模様は大きかつた。廊下に置く足よりも大きかつた。その足が赤くちらちらと三足ほど動いたら、^夏 ^目 ^漱 ^石 低いものは、戸口の幅を、音なく行きすぎた。

第三の頭巾は白と藍との辨慶の格子である。眉廂の下にあらはれた横顔は丸く膨らんでゐる。その片頬の真中が林檎の熟

した程に濃い。尻だけ見える茶褐色の眉毛の下が急に落込んで、思はざる邊から丸い鼻が膨れた頬を少し乗越して、先だけ顔の外へ出た。顔から下は一面に黄色な縞で包まれてゐる。長い袖を三寸あまりも縁側に牽いた。これは頭より高い胡麻竹の杖を突いて來た。杖の先には光を帯びた鳥の羽をふさふさと着けて、照る日に輝かした。縁側に牽く黄色な縞の袖らしい裏が、銀のやうに光つたと思つたら、これも行過ぎた。

すると、すぐ後から眞白な顔があらはれた。額から始まつて、平たい頬を塗つて、顎から耳の附根まで溯つて、壁のやうに靜である。中に眸だけが活きてゐた。唇は紅の色を重ねて、

* Violin

青く光線を反射した胸のあたりは鳩の色のやうに見えて、下は裾迄ばつと視線を亂してゐる中に、小さなヴァイオリンを抱へて、長い弓を嚴かに擔いてゐる。二足で通り過ぎる後には、背中へ黒い繻子の四角な片まを中てて、その真中にある金糸の刺繡が、一度に日の光に浮いた。

最後に出たものは、全く小さい。手摺の下から轉げ落ちさうである。けれども大きな顔をしてゐる。その中でも頭は殊に大きい。それへ五色の冠を戴いてあらはれた。冠の中央にある「ほつち」が高く聳えてゐるやうに思はれる。身にはキの字の模様のある筒袖に、藤鼠の天鵞絨の房のさがつたものを、背から腰の下まで三角に垂れて、赤い足袋を踏んでゐた。

手に持つた朝鮮團扇が身體の半分程ある。團扇には赤と青と黄とて巴を漆で描いてあつた。

行列は靜に自分の前を行過ぎた。あけ放しになつた戸が、空しい日の光を書齋の入口に送つて、縁側に幅二尺の寂しさを感じた時、向うの隅で急にヴァイオリンを擦る音がした。ついで、小さい咽喉が寄合つて、どつと笑ふ聲がした。

宅の子供は、毎日、母の羽織や風呂敷を出して、こんな遊戯をしてゐる。(夏目漱石)

一九 所 感

一、眞面目

夏目漱石を指す。

夏目先生は、自分の知つてゐるうちで、最も眞面目な人の一人であつた。併し先生は最も眞面目であるが故に、眞面目といふことの息苦しさをも能く知つてゐる人であつた。眞面目らしい顔をすることの醜さと趣味の低さをも能く知つてゐる人であつた。随つて、又先生は張切れるやうな眞面目な心持を戯談に包んだり、眞面目でないやうな顔をしながら眞面目なことをしたり、時には眞面目の息苦しさに堪へかねて、戯談の中に遁込んだりすることのある人であつた。さうして、それが或人人には、一體に夏目先生は不眞面目な人、巫山戯た人といふ印象を與へる原因となつてゐたらしい。

Mask.

假面。

併し自分自身の所感を言へば、自分には先生のあの態度が、非常に奥ゆかしく、懐しく、氣高いものに見えた。自分は一體に先生の人格を畏敬してゐたが、中でも眞面目らしい顔をしないところが取りわけ好きであつた。眞面目とはそんなに口癖にお題目のやうに唱へられるべきことではない。又それはマスクのやうに顔にだけ被られるべき物でもない。自分の趣味を言へば、自分は底の眞面目を顔に現さずに済むかぎりには、何時でも快い談話の中に笑つてゐたい。常に笑ひながら自分のなすべき事をなし、言ふべき事を言ひたいと思ふ。人生には殊更しかつめらしくしないで、眞面目な教育をしたり、誠實な訓戒を與へたりすることが出来る

一面もあるのである。

固より自分は、底の眞面目を其のまま外に露出してゐる、一本氣な、正直な、若い人達を敬愛する。併し、何時でも如何にも眞面目な顔をしたがる人や、「一所懸命」といふことを掛聲のやうに常に叫びたがる人などは、到底自分の趣味には合はなう。

一、幸福な顔

自分は幸福な顔をした年若の人を見ると、何時でも、餘計な事を覺えずに、永久に幸福でお出でなさい、と言ひたくなる。併し、もう此の幸福の破れた人達、もう自分達のやうに物を考へ出した人達に向つて、何も知らなかつた昔に歸れと

* Sentimental.

情に腹い。

いふやうな忠告をするのは、既に頭に霜をおく人に緑髪の昔に歸れといふと同様な愚なことであるから、自分は固よりそんな事をしようとは更に思はない。自分が此等の人達に希望するところは、當面の問題を立派に通り抜けて、新しい心持になる日まで勇しく戦つて行くといふことである。出来るならば、又彼等が望むならば、自分は、前途を切拓いて行く彼等に、多少の手傳ひをしたいと思ふ。併し、昔の幸福のみ説いて、前途を望む勇氣を沮喪させるやうな、センチメンタルな同情と説教とをすることは嫌ひである。

併し、學校などのやうに團體生活が行はれてゐる處では、この二種類の人達の間、に不思議な現象が生ずる。煩悶をす

る人は偉い人で、無邪氣に幸福にしてゐる人は偉くない人にされる。自分に何の問題も持つてゐない人までが、附焼刃の煩悶をしなければならぬかのやうに考へられる。こんなにして、一つの學校若しくは一つの學級に於ける煩悶の流行が始まるのである。

若し煩悶をする人が本當に煩悶してゐるのならば、若し彼は煩悶を見せびらかすために煩悶してゐる者でないならば、彼は出来るだけ自分の苦しい顔を他人に見せず、一人て若しくは二三の親友達とだけ、堪へ忍ぶべき筈である。無邪氣な人の無邪氣な幸福を尊重することは、煩悶する人の煩悶が眞實である事の主要なる證據でなければならぬ。自分は煩悶する人にも、本當に眞面目な人人に共通なあの慎ましさが欲しいと思ふ。さうしたら、二三の人の煩悶によつて、無邪氣な幸福な人達の空氣が攪亂されることも、餘程少くなるであらう。

沈黙して、若しくは微笑を湛へて苦しむことは、氣高い人の誇でなければならぬ。(阿部次郎「北郊雜記」)

一一〇 快活

パンヤンの天路歷程を一讀したる者は、天路を辿りつつある基督教徒が、その途中に於て種種の人に出會したるを知らん。中にも不平氏あり、前途の不愉快なるを語りて、己と

(二) Pilgrim Plogress. (一) John Bunyan. (1628—1688)

家。英國の宗教

與に後方に引返すべく苦勸したるを知らん。吾人は天路歷程の巻中に於てのみこの種の人を見るにあらず。隨處にこれを見るなり。而して深く考ふれば、自己も亦この不平氏たるを免れざることなきにあらず。不平、不平、そも之を奈何にかすべき。

支那の隱者の名。

之を寒山子に聞く、心中無一事、萬境不能轉と。されどこれ達人のために言ふべくして、吾人凡庸の徒の企及すべき所にあらず。如何に煩惱なからんと欲するも、煩惱は中より湧くなり。既に煩惱ありて之を遂ぐる能はざるに於ては、不平なき能はず。貧乏人は金を持たんとして不平あり、金持となれば之を失はざらんとして安からず。又一身のみは大なる

高僧。紀伊の人。高雄山の文覺に投じて修道せり。

楚の人。世を憤りて自ら汨羅に投じて死す。明の學者にして思想家。

苦情なき者も、その身邊を顧みれば、言ふに言はれぬ心配あり。人間は到底不平の兒なるか。何ぞそれ不如意多きや。

然れども如何に七顛八倒しても、出来るだけの事以上には出来ず。明慧上人の「可有様」の三字は、實に吾人處世の安心方たらずんばあらず。若し不平を訴へたりとて、事に益なきを知らば、寧ろ不平を訴へざるに若かず。均しく窮地に陥りても、屈原の如く泣蟲たらんよりは、寧ろ王陽明と與に、

閑觀物態皆生意。靜悟天機入窅冥。

道在險夷隨地樂。心忘魚鳥自流形。

と浩歌せんには若かず。

世に不景氣顔あり。如何なる場合に於ても人事の不愉快

なる方面のみを眺め、只管みづから不平の窮鬼となり、恰も船幽靈が仲間を求めて他の船を難破せしめんと企つる如く、世間に向つて不景氣の押賣をなす者なきにあらず、縱令自己はさる惡意なきも、一個の不景氣顔は不景氣顔の看板なり、周圍の人氣を腐らすには其の力餘あり。

凡そ何事にもあれ、傳染的なり、特に何人の胸奥にも不平の分子は儲藏しあれば、一たび不景氣顔に接すれば、期せずして發生せずんばあらず、故に不景氣顔は自ら禍するのみならず、他を禍す、その顔面の八萬四千孔より分泌する不平瓦斯は、忽ちその四邊に分散して、幾多の不景氣顔を化生せずんば休まず、されば協同生活には、^ベストよりも虎疫^ウよりも、この不景氣顔が最も禁物と知るべし。

(一) Pest.
(二) Cholera.

も、この不景氣顔が最も禁物と知るべし。

不平も一生なり、快活も一生なり、縱令世界を我意の如く運轉せしむる大力量は缺けたりとするも、せめて我が一心だけは思ふやうに支配したきものにはあらずや、吾人は果して快活なる能はざるか、快活とて、面白くもなきに、呵呵大笑するにも及ぶまじ、されど吾人は富貴に素しては富貴に行ひ、貧賤に素しては貧賤に行ひ、成功に素しては成功に行ひ、失敗に素しては失敗に行ふ能はざるか、如何に泣蟲を學んで泣きたりとして、その涙が失敗を轉じて成功となすにはあらず、愛兒の亡骸が涙に浮びたりとして、死者復び蘇するにあらず、吾人豈に一生の光陰を死兒の齡を數ふるに消磨せ

んや。

快活は性情なり。甘美なる性情は、苦き人事の中にも其の快喫すべき滋味を見出す。吾人はこの性情を涵養するに於て、宜しくその力を竭さざるべからず。しかもこの性情の底には、偉大なる意志あるを要す。固より偉大なる意志も、時として、は陰鬱なる性情の雲霧に閉さるるものあり。譬へば雲霧に閉されたる富嶽の如し。されど、それが爲に富嶽はつゆその大を減ぜず。一たび一碧瑠璃の如き秋空に聳ゆるその嶽色は、如何にその莊嚴・清崇の美を加ふべきぞ。

快活の秘訣は思切の善きにあり、決斷の迅速なるにあり。若し胸中一點の凝滯なく、軒爽・洞達、表裏燦然、中邊俱徹せば、

如何に煩悶せんと欲するも、その種子なからんとす。凡そ人間の不平・窮愁は思案投首の際に湧出するものなり。今日この事をなし、明日かの事をなし、死者をして死者を葬らしめ、生者をして生者を理めしむる者に於ては、一切の事現金勘定にて、債務もなければ債權もなし。心廣く體胖なり。過去の重荷もなければ、未然の危懼もなし。かくの如くして快活ならざらんと欲するも、決して得べからざるなり。しかもこれ最も意志の力を要す。意志は骨なり、性情は肉なり。而して聰明・高朗なる知識は血液なり。(徳富蘇峯—精神の復興)

一一一 最上川の奇景上

(1201)
ともに羽前國東田川郡に在り。ともに陸羽西線の一驛なれども本文の草せられし頃は汽車の便未だ開けざりしなり。

路上の石に俾の輪の躍れるに愕然として驚き覺むれば、何時の間にか狩川カヌヘの驛は過ぎて、渴するばかりに遠く望み來りし清川附近の山翠は、已に早くも眼前咫尺の間にあり。殊に綠葉の山嵐に搖曳せる、俄に別天地に入りたるを覺ゆるに、われはいたく喜び、今までの苦熱も全く忘れはてて、一意その清く冷かなる空氣を吸ひぬ。

美しき清川の驛に近く、路は風情ある松原に入る。その松原の盡くる處に、始めて最上川の溶溶たる流を見し時、わが心は如何に躍り、わが胸は如何に顫へしぞ。われは俾を下り、その清く美しき深潭に此の身を投せばやとさへ思ひぬ。更に驛の旅亭に到るに及びて、わが心は愈動きぬ。見よ、こ

の驛の如何に古風の趣を備へたるかを見よ、この驛の旅舎の如何に名所圖繪中の旅舎に似たるかを見よ、二階造の堅牢なる家屋は涼しげに數個の室をあけ放ちて、客を迎ふる主婦の朴訥なる中に無限の誠實の心を籠めたる、わが今回の旅行中、嘗て斯かる快き誠實なる待遇に逢ひたる事ありや。かくて三十分後には、われは繼替へたる俾の上に揺られて、その風情多き清川の驛を去りつつあり、驛路の最後の家をも過ぎ、面白き形したる松原をも越ゆれば、兩山の間を流るる溶溶たる最上川の流は、深碧なる水を我が前に湛へて、折折激する水聲は恰も遠笛を聞くが如し。何等の奇景ぞ。我は最上川を斯くまで勝れたる河流とは

かけても想ひたる事なかりき。路は流の右岸を縫ひて、山岳の屈曲、翠嵐の搖曳、殊に其の山勢の迫りて迫らざる、その河身の深くして溶溶たる、最もわれの心を惹きぬ。

われ天下を漫遊して、山川の美を観ること甚だ多し。されど、わが日本の地勢の狭小なるがためか、未だ山中を流れてしかも溶溶大河の趣をなしたるものあるを知らず。富士川の壯、熊野川の奇、孰れも優に天下の奇景たるに足ると雖も、なほ兩岸水漲溢して、船を泛ぶるに足る景に至つては、遂に大陸の一小流にだにも及ぶ能はず。常に以て憾となししに、今この東奥の僻地に、ゆくりなく最上川の一景を得て、以て我が多年の渴を醫するを得たるは、豈に喜ぶべき限にあら

ずや。

俾はがたがたと凹凸多き山路を縫ひて、一步は一步より次第に山深く、遂に清川驛頭の一小禿山を全く雲外に失ふに至りぬ。

之より山は益奇に、水は愈清く、對岸の樹木に白き雲の旗の如く靡きかかれる、無數の皺皺に絲の如き細き瀑布の幾條となく落ちてかかれる、皆一つとして畫にすべき景ならぬはなきに、まして對岸の處處には、二三の茅屋、白堊の絶え絶えに隠見するありて、其の岸なる楊柳の根元に、筵帆を張りたる小さき船の靜に順風を待ちて滞れる、誠に支那の山水圖を見るが如き景なり。

斯くて我は一里半ばかりをや來にけん。前面一帶の地に二三の茅屋の星の如く點在するを認め、車夫に問ひて其の村の名の草薙と稱する山中の一部分なるを知りしが、其の村に入らんとして、ふと鏘鏘たる一種の響の我が耳に入るに、われは頭を擡げて對岸の一角を見つ。

一一二 最上川の奇景下

見よ、此の奇景を。

誰か之を奇ならずと言ふ。對岸一帶壘壁の如き山には、一とこる凹く削りなされたる處ありて、其處よりは驚くべき一大長瀑轟然として落下し、其の形の奇なる、其の落水の盛なる、宛然我等が寫眞にてのみ見たるアルプス山中の瀑に匹如たる趣を呈せるにあらずや。圖らざりき、これ白絲の瀑ならんとは。

我は嘗て其の名を聞かざりしにあらず。否、わが幼き頃、山形にて生ひたち給ひし母君の物語に、よく此の瀑の優れて美しきを聞きしことあり。庄内にさり難き親戚ありて、二度ほど此の最上川を舟にて下りしが、白絲の瀑の景色は今もなほ眼前にありて忘れず。と幾度か語り出で給ひしを、我はいかにして忘れつらん。斯くと思へば、久しき昔の記憶簇簇と我が心中に集まり來りて、我が祖父が藩の米穀を司りて、此の川を酒田に下り給ひし折のことなど、今更に明かに思

ひ出さるるも面白しや。

草薙の人家の盡きんとする處こそ、瀑の全貌を窺ふには最も適せるなれ。瀑は其の幅甚だ大ならざれとも、其の長さは殆ど四十丈にも餘りぬべく、中頃少しく左に折れたる處に無限の嬌態を呈し、鏘鏘として落下する音は宛ら一曲の琴聲の如し。仔細に見れば、對岸瀑壺とも覺しきあたりに、一個の小亭あり。

一步毎に其の瀑にも遠ざかり行きて、遂には其の形も其の音も聞えずなりぬ。されど溪山は此の附近に至りて益色を生じ、奇岩怪石の岸頭に蟠踞するもの漸く多く、雲烟の集散、翠嵐の搖曳、我は幾度心中に快を叫びたるかを知らず。

溪山突兀として影を深潭に落し、雲影の來りて日を蔽ふこと漸く多し。随つて路も亦次第に峻に、俛を捨てて徒歩せざるべからざるところ隨處に現る。されど此の峻に逢ふごとに、我は溪山の風趣の頗る尋常ならざるを見て、轉た興の増すを禁ずること能はざりき。さるにても、これを舟にて下りたらばいかに急湍奔逸、立てたる板を滑るが如き快は即ち無しと雖も、しかも秋風山頭に遍く、紅葉燃ゆるが如き候五里に一泊、十里に一宿、悠悠として仔細に此の勝を探りたらんには、此の世に味ふこと能はざるが如き興味は、我等をして殆ど羽化登仙の思あらしむるに相違なからん。否、月明かに星稀に、斷岸千尺、水落ち石露るる夜、扁舟酒を載せて、棹

(一) 月明星稀、烏鵲南飛。繞樹三匝、無枝可依。(魏武帝短歌行)
(二) 斷岸千尺。山高月小。水落石出。(蘇東坡後赤壁賦)

蘇軾。支那宋時代の詩文の大家。

歌以て之を下らば、東坡先生にあらざといへども、亦兩腋翼を生じて、孤鶴となつて中天に飛ぶが如き興趣を會するならん。惜しむらくは、此の身久しく風塵の間に墮して、十年また快心の遊を爲す能はざるを。

三里にして溪山始めて窮し、其の極まる處、二三の蕭條たる人家を認む、而して其の人家の一軒甚だ瀟洒なる趣を備へて、店頭清淺玉の如くなる山泉を引き、之に雪の如き素麵を浸して、以て旅客に勧むるあり。

溪一たび窮して、更に左に折れ、俄然一大奇景の其の前に横たはれるを認む。我が前には絶大なる深谷窈然として、洞窟を開き、其の傍より奔逸して落ち來れる一大瀑は、さなが

ら一大湘簾を懸けたる如く、其の勢は盛にして、亂るる飛沫は霧の如く四邊を霞む。更に其の向ひには奇岩突として相連なり、其の上を生じたる松は恰も青苔の如き趣を呈し、四面より落ちて集まる水聲は、殆ど人耳を聳せしむ。

我は俦を捨てて、岸頭の大石に踞し、久しく黙して此の自然の優れたる風景に見入りたり。(田山花袋の「旅すがたに據る」)

二二三 うまき泉

美濃國に老いたる夫婦ありけり。ともに七十に餘れり。日ごとに山に分入りて、薪を樵りてなりはひとしけり。ひと日、翁、山にゆきて日ぐらし歸りこねば、嫗こころもと

ながりて、門に立ちて待ちつけぬるに、戌すぐるころ、翁薪
 になひて歸りきぬ。いかに、おそかりつる。と紙燭とりて對ひ
 見るに、思ひかけず、翁の顔かたち、はたちばかりの若人にな
 りて、髪もつややかに、昔のごとなりたり。さても、如何なる
 ことありて、かかりし。と問へば、翁いへらく、「はじめ、山に入り
 て薪樵りてある時、見馴れぬ鳥を見つけて追ひもてゆくに、
 例の山ともおぼえぬところに出てつ、其處に清げに流るる
 泉ありのんど渴きぬれば、掬びて飲むに、よく醸したる酒に
 たがはず、心ゆくばかり飲みけるままにしきりに酔をもよ
 ほして、やがて其處にたふれ伏しぬ。ねぐらもとむる鳥ども
 の來啼くにおどろきて、目さめて急ぎて走りかへりぬ」とい

ふ。

隣なる人もとひ來て、おほかたあざみ言はざるものなし。
 あしたになりて、嫗われも往きて、かの泉汲みて飲ままし。と
 いふむべなり、とく往きぬ。とて、よく道を教へて出したてて
 やりぬ。

かくて其の日も暮れぬれど、嫗かへり來ず。初夜を過ぎた
 れど見え來ず。夜ひと夜、いもねられねば、鳥とともに起きて、
 ゆくへもとむとて急ぎゆく。こころもとなきこと限なし。さ
 れど知りたる道なれば、朝霧のまよひもたどらず、やうやう
 彼處にいたりぬ。泉のあたりを見れど人もなし。狼などにや
 食はれにけん。わが身こそ若返りたれ、年來の妻を失ひては

如何にかせましと、泣きいさちて、たふれ伏しけるが、ちひさき巖の陰に物ありと見て、近づきて見れば、生れ出でて月ばかり経ぬるとおぼゆるばかりの赤子の、ささやかなる聲して泣き居り、よく見れば、嫗が着馴れつる衣の中にうごめきてあれば、かき抱きて、「うばか」と問へば、泣きつつうなづく。やがて懷に入れてやどりにかへり、乳をもらひて養ひ育てけりとぞ。

あまりに旨き泉を、貪りていたく飲みすぎしけるあやまちなりとぞ語り傳へたる。(石川雅望「しみのすみか物語」)

二四 小園

我に二十坪の小園あり。園は家の南にありて上野の杉を垣の外に控へたり。場末の家まばらに建てられたれば、青空は庭の外に擴がりて、雲行き鳥翔る様もいとゆたかに眺めらる。

*東京市なる上野公園を指せり。

大佛をうつめて
しろし花の雲



子規 筆

始めてここに移りし頃は、僅に竹藪を開きたる跡とおぼしく、草も木も無き裸の庭なりしを、やがて家主なる人の小松三本を栽ゑて、やや物めかしたるに、隣の老媪の與へたる薔薇の苗さへ植添へて、四五輪の花に吟興を鼓せらるるこ

(二)
日清戦争の際、
従軍記者として
遼東半島に渡る。

とも多かりき。

一年、軍に従ひて金州に渡りしが、其の歸途病を得て、須磨に故郷に思はぬ日を費し、半年を経て家に歸り着きし時は、秋まさしに暮れんとする頃なりき。庭の面、去年よりは遙にさびまさりて、白菊の一もと二もとねぢくれて咲亂れたる此の景に對して、靜にきのふを思へば、萬感そぞろに胸に滿ちて、辛き命を助かりて歸りし身の衰も、只この嬉しさに忘られて、思はず、三逕就荒と口すさむも涙がちなり。ありふれたる此の花、狭苦しき此の庭が、斯くまで人を感じしめんとはかけても思ひよらざりき。ましてこれより後病愈、募りて、足立たず、門を出づる能はざるに至りし今、小園は余が天地に

(三)
陶淵明が歸去來
辭の中に見ゆる
句なり。

して、草花は余が唯一の詩料となりぬ。余をして幾何か獄窓に呻吟するにまさると思はしむるものは、此の二十歩の地と數種の芳葩とあるがために外ならず。

つぎの年、春暖漸く催して、鳥の聲いとうららかに聞えし或日、病の窓を開きて、端近くにじり出て、讀書に勞れたる目を遊ばしむるに、生き生きとしたる草木の生氣は手のひら程の中にも動きて、まだ薄寒き風のひやひやと病衣の隙を侵すもいと心地よく覺ゆ。

これも隣の廬より貰ひしといふ萩の切株、寸ばかりの緑をふいて、逞しき勢は秋の色も思はる。眞晝過ぎより夕日影、椎の樹に落つるまで、何を見るときもなく、酔ひたるが如く、勞

れたるが如く、恍惚として日を暮すことさへ多かり。かくして今まで病と寒氣とに惱まされて弱り盡したる余は、此の時新に生命を興へられたる小兒の如く、これより萩の芽とともに健全に育つべしと思へり。折ふし黄なる蝶の飛來りて垣根に花をあさるを見ては、すすろ我が魂の自ら動き出て、共に花を尋ね、香を探り、物の芽にとまりて、しばし羽を休むるかと思へば、低き杉垣を越えて隣の庭をうちめぐり、再び舞ひもどりて、松の梢にひらひら、水鉢の上にひらひら、一吹き風に吹きつれて、高く吹かれながら、向うの屋根に隠れたる時、我にもあらず惘然として自失す。忽ち心づけば、身に熱氣を感じて心地なやましく、内に入

り障子閉むると共に蒲團引被れば、夢にもあらず、幻にもあらず、身は廣く限なき原野の中において、今飛びゆきし蝶と共に狂ひ廻る。狂ふにつけて、何處ともなく數百の蝶の群り來りて遊ぶを、つらつら見れば、蝶と見しは皆小さき神の子なり。空に響く樂の音につれて、彼等は躍りつつ舞ひあがり飛びゆくに、我もおくれじと茨葎のきらひなく、踏みしだき躍り超え、思はず野川に落ちしよと見て夢さむれば、寢汗したたかに襦袢を濡して、熱は三十九度にや上るらん。げんげの花盛り過ぎて時鳥の空におとづる頃は、赤き薔薇白き薔薇咲満ちて、芳しき色は見るべき趣なきにはあらねど、我が小園の見所はまこと萩芒のさかりにぞあるべ

き。今年は去年に比ぶれば萩の勢強く、夏の初の枝ぶりさへ
いたくはびこりて、末頼もしく見えぬ。葉の色も去年のやや
黄ばみたるには似ず、緑いと濃し。空晴れたる日は椅子を其
のほとりに据ゑさせ、人に扶けられてやうやく其の椅子に
たどりつき、氣晴しがてら萩の芽につきたる小さき蟲を取
りしことも一度二度にはあらず。桔梗・撫子は實となり、朝顔
は花のやや少くなりし八月の末より、待ちに待ちし萩は一
つ二つ綻びそめたり。飛立つばかりの嬉しさに、指を折りて
あすは四つ、あさては八つ、十日目には千にもなりなんと思
ひ設けし程こそあれ、或夜、野分の風烈しく吹出てつ。安から
ぬ夢を結びて、あくる朝、日たけて眠より覺むれば、庭に何や

* Bucket.

らののしる聲す。心もとなく這ひいでて何ぞと問ふに、今ま
てさしも茂りたる萩の枝大方折れたるなりけり。ひたと胸
つぶれて、いかにせばやと思へど詮なし。斯くと知りせば枝
に杖立てて置かましをなど悔ゆるもおろかなりや。瓦吹飛
ばしたる去年の野分だに斯うはならざりしを、今年の風は
萩のために方角や悪しかりけん。此の日は晴渡りて稍秋氣
を覺えそめしが、余は例の椅子を庭に据ゑさせ、バケツと金
盥とに水を湛へて、折れ残りたる萩の泥を洗へりしかど、空
しく足の痛みを増したるばかりにて、泥つきし枝のさきは
蕾腐りて、終に花咲くことなかりき。園中何事も無きは松と
芒とのみ。

森林太耶。

去年の春、彼岸やや過ぎし頃と覺ゆ。鷗外漁史より草花の種幾袋贈られしを直に播きつけしが、百日草の外は何も生えずしてやみぬ。中にも葉雞頭のほしかりしを、いと口惜しく思ひしが、何とかしけん、今年夏の頃、怪しき芽をあらはししものあり。去年葉雞頭の種を埋めしあたりなれば、必定それなめりと竹を立てて大事に育てしに、果して二葉より赤き色を見せぬ。嬉しくてあたりの晝照草など引きのけ、やうやう尺餘になりし頃、野分荒れしかば、こればかり氣遣ひしに、思の外に萩は折れて、葉雞頭は少し傾きたるばかりなり。扶け起して竹杖にしばりなどせしかば、恙なくて、今は二尺ばかりになりぬ。瘦せてよろよろとしながら、猶燃ゆるが如

賽伯。中村氏。

き紅しだれていとうつくし、二三日ありて向ひの家より貰ひ來れりとして、肥太りたる雞頭四本ばかり植添へたり。其の次の日なりけん、朝まだきに裏戸を叩く聲あり。戸を開けば、不折子が大きな葉雞頭一本引きさげて來りしなりけり。朝霧に濡れつつ手づから植ゑて去りぬ。雞頭葉雞頭かがやくばかり花やかなる秋に押されて、萩ははや散りがちなりしもあはれ深し。

薔薇、萩、芒、桔梗などを持來りて、余が小樂地の創造に力ありし隣の老嫗は、其の後、移りて他にありしが、今年秋風に先立てみまかりしとぞ。

ごてごてと草花植ゑし小庭かな (正岡子規—子規遺稿)

二五 野心

人生はこれ戰場である。勝つことが出来なければ、敗けなければならぬ。社會競争の激甚なる現代にあつては、人生の行路難は決して山海の比ではない。坦坦たる大道、直に長安に通ずと云ふが如きことは、到底望むべからざることである。蹉躓があれば、幾度でも起上つて突進しなければならぬ。迫害があれば、忍んで打勝たなければならぬ。誘惑があれば、迷はないて自己の進むべき道を歩かなければならぬ。飽くまでも堅忍不拔の勇を鼓して突進するの覺悟が肝要である。我等が生存の意義は此處にある。男兒苟も生く

るとならば、驚天動地の意氣抱負がなければならぬ。野心のない、確信のない人は、困難の來る毎に狐疑躊躇して、快刀亂麻を斷つが如き決斷に出ることが出来ず、好機會を造ることは勿論、折角遭遇した機會をも空しく逸し去らしめるのである。彼等の前途には光明がない、希望がない、落花凋葉の悲哀はあるが、陽春三月の歡呼はないのである。畢竟、野心のない人は、斯くして一生を無意味に送らなければならぬのである。

野心は原動力である。標的は羅針盤である。野心なく標的なき盲動は、終に自暴自棄に了るのみである。少くとも凡俗の間に、嶄然頭角を露はして、社會に貢獻し、文教を裨益し、世

に重きをなさんとするならば、水火を踏むも尙辭せない所信をもつてゐなければならぬ。この所信は常に大標的、大野心を抱いてゐる者でなければ保たれぬのである。

各個人が常に大標的、大野心を抱いて雄心勃勃たるならば、その國家も生氣潑刺として向上發展するのである。かの英國、米國等が國勢隆隆として、軍事上にも、經濟上にも、世界の覇權を掌握せんとする意氣精神に充ちてゐるのは、その國家に國家的標的のあるにも因るけれども、同時に其の國民が個人としても雄心勃勃として努力活動してゐるからである。之に反して、國家として向上發展の氣勢なき國に於ては、その國民も同時に意氣銷沈してゐると言へる。之を古

今東西の歴史に照して見れば自ら明かである。曾ては氣象剛健、海上を家として、殖民地を經營し、世界の商權を壟斷してゐた國が、國家的、國民的、大野心を有せざるに至つて、その國民の氣力も漸次に萎靡沈滞し、桃源裡に醉生夢死するやうになつたものもある。又曾ては廣大な殖民地を有し、而も世界有數の資本國であつたものが、今日は劣等國として振はず、昔日の面影すら留めないものもあるが、之はその國民が、個人として、大體に於て無野心、無標的になつたからである。斯くの如く、國家そのものの野心、標的と、國民各個人の野心、標的とは兩兩相關聯してゐる。故に個人の野心、標的は大體に於て國家の野心、標的に依つて動かさるべきものである。

るとは言へ、各個人の野心標的は常に必ずしも國家の野心標的に從屬すべきものではない。各個人は各個人として、各自獨得の野心標的を抱懷すべきである。要は各人皆自分相應の野心標的を抱いて、生氣潑刺たる點に於て一致して居りさへすれば、それでよいのである。それが同時に國家の發展を助ける所以となるのである。

然らば大野心大標的とは何であるか、或は何を意味するのであるか、多くの世人は人生努力の標的として權勢・名譽・黄金の三つを擧げるのが常である。併し吾人は此等の三標的を以て無上の價值あるものとはしないのである。

抑、人生をして眞に意義あらしむるものは、權勢でも名譽でも富貴でもない、實にその人自身の實力である。實力を運用して、世のため人のために益するところがあれば、これこそ生きがひがあるのである。即ち眞に意義ある人間の生活である。その人の存在してゐるために社會が發達し、人類の福祉が増進せられるならば、確實に生存の意義があるのである。苟も人間と生れたならば、その生れた時の社會よりも、死ぬ時の社會を幾分か自分の力で改良してゐなければならぬ。實力ある人ならば、文明の發達向上に貢獻する所が必ずあるに相違ない。この實力ある人となること、この實力を何處までも強大にしてゆくこと、これこそ吾人の野心であり標的である。

物徂徠。徳川時代の儒者。

勿論、稟性及び境遇は如何ともすることが出来ないの
あるが、苟も氣力ある人ならば、相應に生きがひある生活を
送り得るのである。徂徠は「豆を嚙つて古今の英雄を罵るを
愉快とする」と言つてゐる。殊更罵らないでも、自ら古今の英
雄偉人の列に加はるのも亦愉快ではないか。英雄といひ聖
賢といふ、彼何者ぞ、我何者ぞ、十度してなほ能くしなければ
百度なすべきである。尙能くしなければ千度なすべきであ
る。この間に、無氣力者の味ふ事の出来ない愉快がある。意義
ある生活ならば、生きがひのある生活ならば、大であらうと
小であらうと、成功すると失敗するとを問はず、眞誠の愉快
が伴ふに相違ない。

最後に言ふ、苟も氣力ある青年ならば、宜しく大野心を抱
いて、飽く迄、猛奮勇進すべきである。 (澤柳政太郎の文に據る)

二六 待賢門の戦上

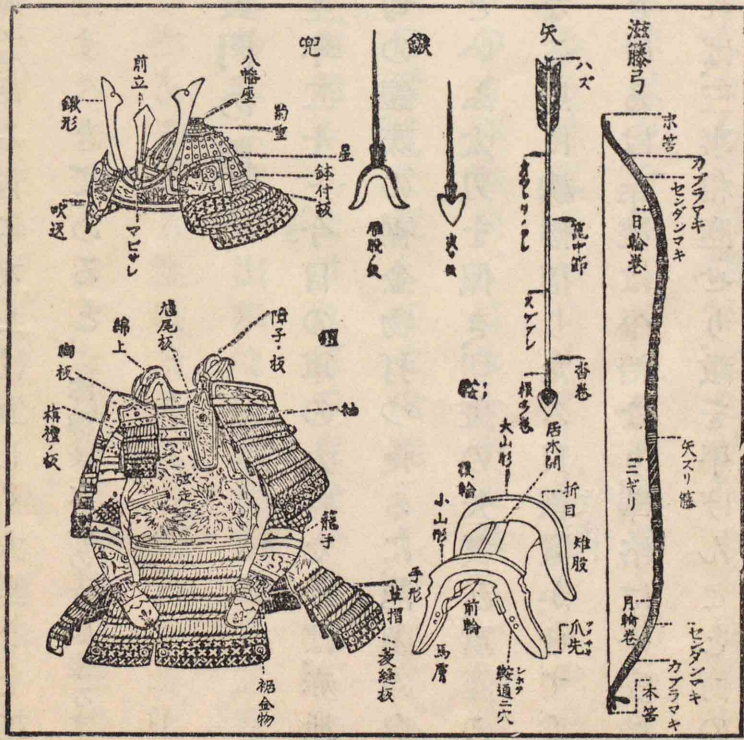
平重盛。
平治元年十二月。

(四)(五)
とにも漢高祖の
臣。

左衛門佐重盛は、生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地
の錦の直垂に、櫛の匂の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の冑
の緒を締めて、小鳥といふ太刀を佩き、切斑の矢負ひ、重藤の
弓持ちて、黄桃花毛なる馬に柳櫻摺りたる貝鞍置かせて乗
りたまへり。重盛宣ひけるは、年號は平治なり、華洛は平安城
なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げんこと何の
疑かあるべき。誰かここに樊噲、張良が勇をなさざらん。とて、

三千餘騎を三手に分けて、近衛中御門・大炊御門・大宮表へ打ちいでて、陽明待賢
郁芳門へ押寄せた
り。

大内には、三方の門を鎖し固め、表をば開かれたり、承明建禮の脇の小門をもともに開きて、大庭には馬ども多く引きたてたり、梅壺



桐壺紫宸殿の前後まで、兵ひしと並みゐたり。源氏の勢なれば白旗二十餘旒うち立てたり。大宮表には、平家の赤旗三十餘旒さしあげて、勇み進める三千餘騎、一度に関をどつと作りければ、大内も響き渡りて夥し。

関の聲に驚きて、只今までゆゆしく見えられつる信頼卿、顔色變りて草葉の如くにて南階を下られけるが、膝ふるひて下りかねたり。人並に馬に乘らんと引寄せさせたれども、太り責めたる大の男の、大鎧は着たり、馬は大きなり、乗煩ふうへ、主の心にも似ず逸り切つたる逸物なれば、つと出てんつと出でんとしけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒もかくやと覺

藤原信頼。

周の穆王は八頭の駿馬に跨がり天下を巡行せりといふ。

源義朝

ゆるばかりにて、乗りかね給ふ所を、侍二人つと寄つて、疾く
 召し候へ。とておし揚げたり。餘りにや押したりけん、弓手の
 方へ乗越して、伏しざまにどうと落つ。急ぎ引起して見れば、
 顔に沙ひしと付き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體
 を見て、日ごろは大將とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、か
 の信頼といふ不覺人は臆したりな。とて日華門を打出でて
 郁芳門へ向はれければ、信頼も鼻血おし拭ひ、兎角して馬に
 搔乗せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用に合ふべしとも
 見えざりけり。

左衛門佐重盛、五百餘騎をば大宮表に残し置き、五百餘騎
 にて押寄せて、呼ばはり給ひけるは、この門の大將軍は信頼

源義平。義朝の長子。

卿と見るは僻目か。かく申すは桓武天皇の苗裔、太宰大貳清
 盛が嫡子、左衛門佐重盛、生年二十三、と名告り懸ければ、信
 頼返事にも及ばず、それ防げ、侍ども、とて引退く。大將の引き
 給ふ間、防ぐ侍一人もなし。われ先にと逃げければ、重盛いよ
 いよ勇みて大庭の椋の木のもとまで攻めつけたり。義朝こ
 れを見て、悪源太はなきか。信頼といふ大臆病人が、待賢門を
 はや破られつるぞや。かの敵追ひいだせ。と宣ひければ、承り
 候。とて駈けられけり。續く兵には、鎌田兵衛後藤兵衛佐佐木
 源三、波多野次郎、三浦荒次郎、須藤刑部長井齋藤別當、岡部六
 彌、太猪俣小平、太熊谷次郎、平山武者所、金子十郎、足立右馬允
 上、總介八郎、關次郎、片桐小八郎大夫、以上十七騎、轡を雙べて

比企郡（二）にあり。

比企郡（一）
比企郡（二）

馳向ふ。義平、大音聲を揚げて、この手の大將は誰人ぞ、名告れ、聞かん。かく申すは、清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝が嫡子、鎌倉悪源太義平と申す者なり。生年十五歳、武藏の大藏（三）の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を伐ちしより、此の方、度度の合戦に一度も不覺の名を取らず、年積つて十九歳、見參せん（四）。とて、五百餘騎のまん中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、豎様、横様、十文字に、敵をさつと蹴散らし、て、葉武者どもに目を掛けそ。大將軍を組んで討て、櫃の匂の鎧に、蝶の裾金物打つて、黄桃花毛の馬に乗つたるこそ重盛よ。押雙べて組んで落ち、手捕にせよ。と下知すれば、大將を組

紫宸殿（一）の南庭（二）にあり。

平家貞（四）。
平貞盛（五）。重盛より六代前にして鎮守府將軍たりし人。

ませじと、防ぐ平家の侍ども、與三左衛門・新藤左衛門を始として、百騎ばかりが中にぞ隔りける。悪源太を始として、十七騎の兵ども、大將軍に目を懸けて、大庭の椋の木を中にたて、左近（一）の櫻（二）右近の橋を七八度まで追廻して、組まん組まんとぞ揉うだりける。十七騎に駈立てられて、五百餘騎叶はじとや思ひけん、大宮表へさつと引く。

二七 待賢門の戦下

大將左衛門佐の弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふ所に、筑後守つと参りて、曩祖平將軍（三）の二度生れ替り給へる君かな。と向うざまに譽め奉れば、今一度駈けて家貞に見せんとや

思はれけん。前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、又大庭の椋の木まで攻寄せたり。又惡源太駈向ひ、見廻していひけるは、只今向ひたるは皆新手の兵なり。但し大將は元の大將重盛ぞ。以前こそ洩すとも、今度においては餘すまじ。押雙んで捕れ、兵ども。と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、われ先にと進みければ、今度は、難波次郎同三郎、瀬尾太郎、伊藤武者を始として、百餘騎が中に隔てたるに、事ともせず、惡源太、弓をば小脇にかい、挟み、鎧ふんばり突立ちあがり、左右の手を揚げ、幸に義平源氏の嫡子なり。御邊も平家の嫡子なり。敵には誰か嫌はん。寄れや組まん。といふ儘に、先如く大庭の椋の木の下を追廻して、五六度までこそ揉うだ

りけれ。

解りしむるも、いと思はれぬのちあつう

重盛組みぬべうもなくや思はれけん。又大宮表へ引いて出づ。惡源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけるに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、汝が不覺に防げばこそ、敵、度度駈入るらめ、かれ速に追ひいませ。といひ遣はされければ、俊綱馳せてこの由をいふに、承り候。進めや者ども。とて色も變らぬ十七騎、大宮表に駈出でて、敵五百騎が中へ面も振らず割つて入る。引きたてたる勢なれば、馬の足を立てかねて、大宮を下りに、二條を東へ引きければ、我が子ながらも義平は、よく駈けたるかな、あ駈けたり。とぞ譽められける。

大將重盛・與三左衛門景安・新藤左衛門家泰・主従三騎かけ
 放れ、二條を東へ引かれければ、惡源太・鎌田にきつと目合せ
 て、爰に落つるは大將とこそ見れ返せや。とて追つかけたり。
 既に堀河にて追詰めけるが、弓手の方に材木多く充ち満ち
 たるに、惡源太の乗り給へる馬片なつきの駒にて、材木にや
 驚きけん、馬手の方へ蹶飛んで、小膝を折りてどうと伏す。鎌
 田兵衛延ばさじと、十三束取つて番ひ、よつ引いてひようと
 射る。重盛の射向の袖にはたと中りて飛返る。やがて二の矢
 を射たりければ、押附にちようと中りて、籠かつぎ碎けて跳
 り返れり。惡源太、これは聞ゆる唐皮カラダといふ鎧ヨロイござんなれ。馬
 を射て、落ちん所を討て、と下知せられければ、又よつ引いて、

追ひざまに筈の隠るるほど射込みたり。馬は屏風を返す如
 く倒るれば、材木の上に跳落され、冑も落ちて大童になり給
 ふ。鎌田堀河を馳越えて、重盛に組まんと落合ふ。

重盛近づけては叶はじとや思はれけん、弓の弭にて鎌田
 が冑の鉢をちようと突く。突かれてゆらめく間に、冑を取つ
 て打着つつ、緒を強くこそ締められけれ。與三左衛門馳寄つ
 て中に隔り申しけるは、漢コの紀信は、高祖の命に代りて滎陽
 の圍みを出し、終に天下を保たせき。主辱コしめらるる時は臣
 死すといふに非ずや。景安爰に在り、寄れや組まん。といふ儘
 に、鎌田兵衛と引組んで、取つて押へける處に、惡源太馬引起
 し、これも堀河を馳越えて、重盛に組まんと飛んで懸りける

漢の高祖、項羽
 のために滎陽に
 圍まれし時、紀
 信は高祖と稱し
 て楚を欺き、高
 祖を脱せしめた
 り。
 漢の語にて、
 范蠡の語にて、
 國語に出てたり。

が、鎌田をや助くる、大將をや討たんと思案しけれども、大將には又も寄せ合ふべし、正家を討たせては叶はじと思ひ、與三左衛門に落合うて、三刀刺して、首を取る。重盛は憑み切つたる景安討たせて、命生きて何かせんとて、既に惡源太と組まんとせられけるを、進藤左衛門馳來り、家泰が候はざらん所にてこそ、大將の御命をば捨て給ふべけれ。とて、我が馬を引向け、中に隔てて惡源太とむずと組む。正家は重盛に組まんとしけるが、主を討たせては叶はじと思ひければ、進藤左衛門に落重なつて首を搔く。この間に、重盛は虎口を遁れて六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからましかば助かり難き命なり。(平治物語)

二八 讀書の選擇

* Emerson.
(1803—1882)
著 米國の哲學

* エマーソン曰く、書を讀まば、最も適當なるもののみを讀むべし。さらぬ群書の涉獵に、記憶力を徒費すること勿れ。とかの新聞・雜誌と拙劣なる小説とのみを愛讀する者は、エマーソンの所謂劣等なる群書に、記憶力を徒費するものなり。否、彼等にして、かかる劣等なる讀書の間に歲月を涉りて、毫も良好なる讀書に趣味を覓むることを勉めずんば、それは昏に時間と記憶力との徒費のみにあらし、かかる讀書は注意力を薄弱ならしめ、思想の清新を絶ち、氣象の煥發を妨げ、神餒氣沮みて、人をして頹然として生氣なきに至らしむべ

趣味識

我々が美しいと感じる性質

し。

これを覺醒せんとするには如何にすべき。エマーソンまた教へて曰く、讀書の最良法は、かの時間と紙とを以て製作したるものを描いて、直に天然を讀むにあり。と然り、誠に汝の趣味の睡眠を自覺せば、暫くその新聞雜誌と小説とを棄てて、名山・大川の間に、直に秀麗なる天然の文學に接せよ、親しく偉大なる審美の靈光に浴せよ。庶幾はくは汝が趣味を覺醒せしむることを得んか。

偉大なる文學は偉大なる天然に近し。天然の爲すところは天才の筆亦よくこれを爲すことを得べし。名篇大作に親炙するは、恰も名山・大川の間を逍遙するに似たり。されば善

良なる讀書はよく眠れる趣味識を警醒し、よくこれを啓發し、助成し、清新なる思想、斬新なる筆力を涵養するものなり。予は目下の讀書界を警醒し、指導すべき唯一の急務は、これに讀書の選擇を教ふるにありと信ぜんとす。

苟も書を讀まんとせば、成るべく優等なるものを選ぶべきこと勿論なり。されども最も優等なる書、即ち第一流の書は、天下そもそも幾何かある。今單に日本の文學書についていはば、萬葉の一部と源語と近松の作と、その他なほ強ひて二三を數ふるを得とも、一國の文學界の讀書をこの僅少なる書冊に限らんことは、殆どなし得べきにあらじ。否、かくの如きは、實に予等が偏狹・固陋として忌むところなり。

今この偏狹と固陋とを脱して、よく優等なる書に専なることを得んとせば、當に如何にかすべきか。かのエマーソンは實行し得べき方法なりと稱して、左の三則を示しぬ。

先づ曰く、一年を経ざる著作は讀むこと勿れ。と。蓋し、一年を経てなほ社會に忘れられざるものは、或は多少の趣味あるものならん。一年をだに經ずして、反古として投棄せらるるものは、恐らくは一讀の價值なきものならん。歲月の淘汰を待たずして、徒に争うて新出版物を讀まんには、徒勞と時間とを賭して文學通の虛名を博し得んのみ。

又曰く、有名ならぬものは讀むこと勿れ。と。こは徒に所謂珍本に蟻集することなからんことを教ふるなり。そもそも

名聲とは多數の識者の鑑賞の結果にあらずや。その多數の鑑賞に反して、ある機會のために纔に散佚を免れたる古書を、殊更に熟讀せんは、殆どこれ癡に類せずや。さる疑はしき勞力を費さんよりは、まづ有名なるものを讀みつくせ。予等の眼前には、半生を讀書に費すとも、なほ熟讀玩味する能はざるべき、許多の有名なる著作あるにあらずや。

又曰く、嗜好に適せざるものは讀むこと勿れ。と。極めて野卑なる嗜好の人を誤ることは、いづれの方面に於ても、我等の知る所なれども、前述の二條件に適合したる範圍に於て、その嗜好する所を求めば、蓋し大過なきを得んか。更にこの條件を敷演して、再度以上讀破することを欲せざる書は讀

むことなかれ。とさへ説ける人あり。試に思へ、現時の讀書界がよく再讀・玩味したる新版物、そもいくばかある。讀者は選擇を忘れ、作者は推敲を忘れ、相率ゐて没趣味の中に投ぜんとす、歎ぜざるべけんや。

故におもへらく、以上の三則は、讀書界の時弊を救ふべき最好手段なりと。

新訂新撰國語讀本卷五終

大正十四年一月二十日 訂正發行
 文部省檢定 濟定檢省部文
 中國語科 校用

大正十三年十月二十四日 印刷
 大正十三年十月二十七日 發行
 大正十四年一月十七日 訂正印刷
 大正十四年一月二十日 訂正發行

新訂新撰國語讀本(全十冊)

卷	定價	臨時定價
卷一、二、各金四拾壹錢	卷一、二、各金六拾八錢	
卷三、四、各金參拾七錢	卷三、四、各金六拾壹錢	
卷五、六、各金參拾七錢	卷五、六、各金五拾五錢	
卷七、八、各金參拾參錢		



編輯者 佐々政一
 補修者 大町芳衛
 補修者 武島又次郎
 補修者 杉敏介
 發行兼印刷者 東京市神田區錦町一丁目十番地 株式會社 明治書院
 取締役社長 鈴木友三郎

發行所

(東京市神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番)

株式會社

明治書院

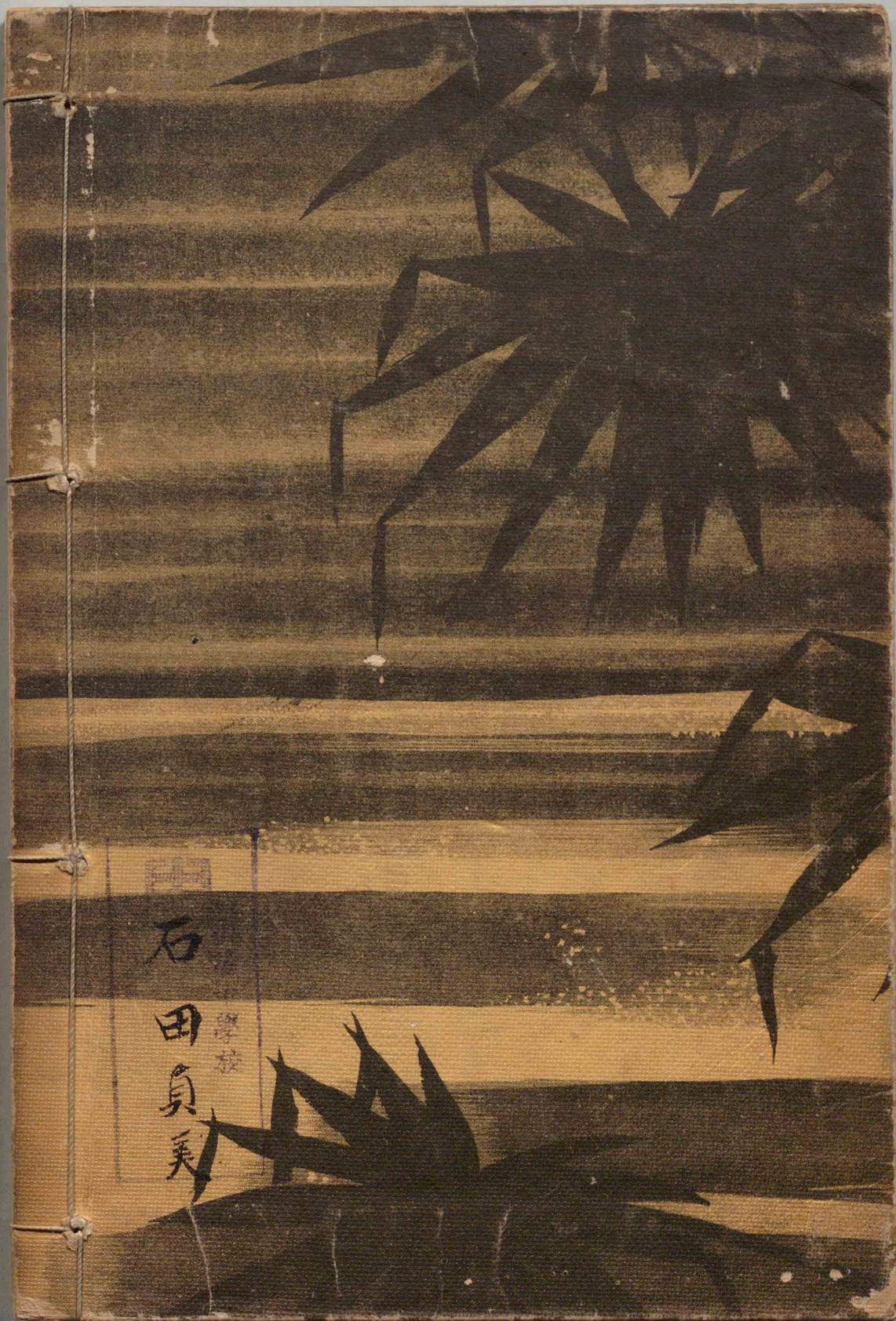
電話神田(25) 一四一四番

タケノコ

ト
ト



S. Ishida



石田貞美

學校